
華風組の聡次郎

yuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

華風組の聡次郎

【Nコード】

N6599Y

【作者名】

yuki

【あらすじ】

以前載せたお話を、修正、改行等おこなったの再掲載です。

こてつ物語の、土間が、まだ少年だった頃のお話。

両親を失い、家出をした聡次郎は組長の妹、富士子を頼って華風組の門をたたく。聡次郎には刀使いとしての天才的な才能と、我を忘れてしまうと言う大きな欠点があり、逆上し易い所があった。心配したハルと組長が聡次郎から刀を取り上げた為、聡次郎は反発。しかし、ハルが身を呈して富士子と聡次郎を守る姿に、聡次郎は冷静になる手段を手に入れたいとハルに懇願する。

火事

聡次郎はためらっていた。ほんの一瞬だが。

その手の中には杯がある。

「これを飲んだら後戻りはできない」
そう組長に言われてほんの一瞬だがためらいが生まれた。

周りの視線も感じているし、組長の視線も感じている。そして富士子の視線が最も強く感じられるような気がした。ためらったなどと富士子の前で思われたくはない。

聡次郎は一気に杯を飲み干した。

富士子はこっそりと小さなため息をついていたが、聡次郎が気付く事はなかった。

聡次郎が華風組にやってきたのは聡次郎十八歳の秋である。

子供の頃は警官の父に剣道を習い、常に父に憧れを抱いていた聡次郎だが、近年はその父とさっぱりそりが合わなくなり、かろうじて道場には通っているものの、やることなすこと父に逆らってばかりいた。

聡次郎自身は逆らっているつもりはないが、父から見てそう見えるなら仕方ない。

母はいつでも父の味方だし、父と顔を合わせてもろくなことはないので、聡次郎は父を避けてばかりいた。

そんな時に事件が起きた。

聡次郎の友人が他校の生徒に絡まれたのをきっかけに、大きな喧嘩が勃発した。

もちろん聡次郎も巻き込まれ応戦していたのだが、その時竹刀の代わりについ、手元に転がって来た鉄の棒を握ってしまった。それがこれからの自分の人生を狂わせるとも知らずに。

「聡次郎、後ろだ！」友人の声で聡次郎は振り向いた。誰かが自分に向かって立て看板を振り下ろそうとしている。とっさに手元の鉄の棒を握る。そして跳ね返した。

そのままいつものようにかまえたのだが……。

感覚が、違った。ずしりとした鉄の感覚。普段味わうことのない重み。恍惚感が襲ってくる。

その時、聡次郎は我を忘れていた。気が付くと相手の生徒は肩を押さえてもがいている。

聡次郎は相手の肩をたたき折っていたのである。なんの記憶もないままに。

当然事は警察沙汰になり、呼び出された親の面目は丸つぶれ。聡次郎は停学処分。道場は出入り禁止だ。

しかし、肝心の聡次郎はあの鉄の棒を持った時の感覚が忘れられない。異常なまでの恍惚感。

あれはいったい何だったんだろう？ そればかりが頭をめぐり、親の言葉は耳に入っていなかった。

学校にも道場にもいかないとなると、かなりの暇を持て余した。あちこち歩き回る訳にもいかない。

しかしじつとしていればあの感覚の事ばかり思い出す。仕方が無いので聡次郎は近所を散歩することにした。

散歩の途中で、幼い男の子が他の子供にいじめられているのを見かけた。その子供は泣いてばかりいてまるで反撃する様子もない。仕方が無いのでいじめている子たちを追い払い、泣いている男の子に声をかけた。

「男のくせにそんなに泣いてどうするんだよ。だから余計にいじめられるんだ」

「違うよ。僕が泣くからじゃないよ。僕がやくざの子だからいじめるんだよ」

男の子がしゃくりあげながら言う。

「それでも男だったらこう言う時はやりかえさなきゃ。……家はど

「ごだい？」

「うう」

男の子は目の前の家を指差した。

玄関、と言うより通用口、といった風情。とにかく呼び鈴を鳴らしてみる。

「はい」

若い女の声でインターフォン越しに返事があつた。

「あの、この家の前で子供が泣いてるんですけど、この子ですか？」

と、聡次郎が聞いた。

「すみません。すぐそっちに行きます」

と返事があつて間もなく、入口に少女が現れた。自分と同じくらいに見える。地味な感じのおとなしそうな少女だ。

「辰雄、一人で帰って来たの？」

少女が男の子に聞いた。

「この子、弟かい？」

聡次郎が少女に聞いた。

「親戚。あなた、辰雄を連れて来てくれたの？」

「いや、この子がこの家の前で泣いてたから、家を聞いたらここだつて。それでとりあえず呼び鈴を鳴らしただけさ」

「そう……あなたあんまりこの家に近付かない方がいいわよ。辰雄、おいで」

そう言っつて少女はさっさと扉を閉めてしまっつ。

なんだよ。せつかく教えてやっつたのに、礼も無しかよ。聡次郎はむっつとした。

翌日も同じ場所で辰雄を見かけた。今度はいじめられている訳ではないが、一人でボールを壁に投げつづけている。跳ね返つたボールを取ろうとするが、手先だけで受け止めようとしているのでなかなかボールが捕まらずにいる。

「ダメだそれじゃ。ちゃんと身体で受け止めなくちゃ」
聡次郎が思わず口を出す。

「ボールの前に身体を持つて行つて、胸元で受け止める。こうだ、やってみな」

自分で手本を見せて、辰雄にボールを投げてやる。今度は辰雄も上手に受け止める。

「キャッチボールの相手になつてやるうか？」

「いいの？」

辰雄が目を輝かせる。

「いいさ、俺も暇を持て余しているんだから」
そう言つてボールを投げてやると、辰雄も喜んでボールを投げ返してきた。しばらく相手をしてやっつていると

「おばちゃん」

辰雄が少女に気付いて声をかける。

「辰雄、こんなところで遊んでいたの？」

そう言いながらも少女が聡次郎を見る。何となく嫌な……苦手な目つきだ。

「ここには近づかない方がいいって言ったでしょう？」

少女はいきなり切り出した。

「どこにいようが余計な御世話だろ？なんだい、その子と遊んでやったのに。昨日だって礼の一つも言わなかったじゃないか」

聡次郎は少女をなじった。

「あなた、ここがどこかわかってないでしょう？ここはね、華風組の自宅の裏なの。こんな所をうるついでるのを知ってる人に見られたら、余計な噂を立てられるだけよ。悪い事は言わないからここには来ない方がいいわよ」

少女はつつけんどんに言う。

「道を歩くのにいちいち人の目なんか気にしてられるか。俺はこの子と気があったただけだ。ほっといてくれ」

聡次郎はボールを辰雄に返してやると、さっさと帰って行った。

家に帰って見るといきなり母親に小言を聞かされた。

「聡次郎、あなたがやくざの家に出入りしてるって、本当？」

短い時間でこれまた盛大な尾ひれが付いたものだ。近所の誰かが

好き勝手なことを言っているのだろうか？

「裏口で見かけた子供の相手をしたただだよ。誰だよ、そんなデマ流してるやつは」

「誰でもいいわ。あなたあんな事件起こしたばかりだから今は色眼鏡で見られるのよ。少し自重しなさい」

「おとなしくしてるじゃないか。それとも一日中家に閉じこもっていろって言うのかよ」

「とにかくおとなしくしててちょうだい。お父さんには言わないでおくから。これじゃ安心して出かけられないわ」

「どこか出掛けるのか？」

「親の言う事なんてちっとも聞いちゃいないんだから。明日の法事のために今夜からお父さんと、おじいちゃんの家泊まってくるの。明日の夜には帰るから、おとなしくしているのよ」

見ればまだ早い時間にもかかわらず、夕食の用意が出来ている。これから支度をして出かけるのだろう。

うるさい親がいなければ、家の中の方がのんびりできる。そう思いながら聡次郎は自分の部屋に戻って行った。

親の居ない気軽さで、深夜まで起きていたので、居間の電話がけたたましくなっている事に聡次郎はなかなか気付かずだった。ねむい身体を無理やり起こし、ようやく電話に出ると親戚の叔母の切迫

した声が耳に響いた。

「もしもし、聡次郎君？大変なの。おじいちゃんの家が火事になって、全員行方不明だっというの」

聡次郎が病院に着くころには、全員の身元が判明していた。両親の遺体は目で見てそれと解る状態ではなかった。

「身体的特徴」

「歯形が一致」

まるでテレビのニュースで聞く様な単語を耳にしながら、葬儀の準備が進んでいく。

葬儀の最中、聡次郎は列席者達の自分に向ける視線が普通ではない事に気が付いた。皆、よそよそしく、どこか冷たい。同情の言葉の裏に何か嫌なものを感じる。

精進落としが終わる頃、廊下の奥からひそひそと話し声が聞こえた。

「いくら身内だからって、暴力沙汰を起こした上にやくざの家に入りしている様な子を引き取らなくちゃいけないなんて」

俺の事か？

富士子

その夜、聡次郎は家出をした。両親の写真と身の回りのわずかな着替えしか持たなかった。一瞬、竹刀を持つとかとも考えたが、目立ちすぎるし、二度とふるつこともないような気がして持たなかった。

最初の夜は友人にこっそり泊めてもらったが、それでは足が付くので、二日目は街を歩き回った後、公園で野宿をした。どこか行き場を決めなくてはいけない。やくざの家に近づいただけでこうまで言われてしまうなら、いつそやくざになってしまおうか？そんな事を漠然と考えながら、聡次郎は華風組の組長の家の通用口にやってきた。

そんな時に限って、そこには誰もいなかった。辰雄の姿もない。表に事務所があるようだが、どうせすぐに追り返されると思った。ここで待つしかない。

しばらく待っていると、案の定、あの少女が辰雄を連れてやってきた。聡次郎を見て唾然としている。

「あなたも懲りないわね。こんなところにいたら、誤解されるって言ったでしょ」

「もうとつくに誤解されている。他に行くあてが無いからここに来た」

「家に帰ればいいじゃない」

「帰る家なんてない。両親は死んだ。何処へも行くところなんてないんだ。俺を華風組に入れてくれ」

少女は目を丸くした。

「それなら親戚の家とか……」

「その親戚が俺を迷惑がってる。あんなところでうまくやれるとは思えない。お前、ここに住んでるんだろ？ 誰かに言って取り継いでくれないか？」

「無茶な事言わないでよ。私は関係ないわ。頼むんだったら事務所に行つて自分で頼めばいいじゃない」

「そんなことしたって追い返されるのは目に見えているじゃないか。取り継いでくれるまで、俺、ここから離れないぜ」

「勝手にすれば？ 私は知らないから」

少女はそう言つて辰雄と中に入つてしまふ。聡次郎は仕方なく、入口に座り込んだ。

それから人が出てくる気配はなかったが、聡次郎は待った。ただ待ち続けた。本当に他に行くところも行きたい所も無かった。何がしたいのか、何をすればいいのかも解らなかつた。ただ、途方に暮れて待ち続けるほか無かつた。

一夜明けて、制服姿の少女と園服を着た辰雄が姿を現した。

「あきれた。あんた帰らなかったの？」

「言っただろ、帰るところなんてないんだ。お前が中に入れてくれなきゃ、俺はここで待つよりほかにないんだ」

「本気なの？ 自分が何言ってるか解ってるの？」

「ああ解ってるさ。でも、帰るところが無い以上、俺、ここに入るかのたれ死ぬかのどっちかしかないんだ。だから俺は絶対にここに入ると決めただ」

「何だか子供じみた事を言った気がした。それでも他に道があるとも思えなかった。」

少女は黙り込んでしばらく聡次郎を見ている。ああ、またいやな目つきをしていると聡次郎は思う。

不意に少女は入口の扉を開けた。

「どうしても入る？ もう二度と戻れないかもしれないわよ」
少女が聞いた。

「もう、戻る所なんてないんだ」
聡次郎が答えた。

「そう。なら入って、今人を呼んで来るから」
少女は一層暗い目をして聡次郎を招き入れる。

「お前、名前は？」

「富士子。あんたは？」

「土間、聡次郎だ」

「聡次郎ね、一応兄さんに話してみるわ。無駄だと思っけど」
そう言っつて富士子は奥へと消えていく。

頼りない仲介役だが仕方ない。聡次郎はそのまま待っていた。

しばらくすると、しっかりとした体格の男がやってきた。

「お前が聡次郎か？」

聡次郎は黙っつてうなずいた。

「俺は春治だ。多分俺がお前の面倒をみる事になると思う。よろしくな」

春治が愛想よく言った。

「それじゃ……」

「お前の若さでは異例だが、組長はお前を組員にするつもりだよ。多分富士子さんが説き伏せたんだろうな。そんな若さでここに来ちまったのも不運だが、これも何かの縁なんだろう」

そう言っつて春治は聡次郎を事務所の様な所へ連れて来た。

周りには大勢の大人達、一番奥に組長らしき人物。その隣にはお
かみさんらしき女性、そして驚いたことにそのすぐそばに、富士子

と辰雄がいた。

「私が華風組組長の華風正嗣だ。隣は妻の静江、前にいるのは息子の辰雄。その隣は妹の富士子だ」

妹！ 富士子は組長の妹だったのか。そして辰雄は息子……

「他に私には弟夫婦もいるが、今は離れて暮らしている。お前がここに住めば、実質寝食を共にするのは私達になるだろう。本当にここに入る気があるんだな？」

「はい」

組長の問いに聡次郎は即答した。少し早すぎるぐらいに。

「ここに杯が用意してある。これから儀式を始めるが、この杯を飲んだらもう元の世界には戻れない。後に戻ることは出来なくなるぞ。それでいいんだな？」

一瞬、本当に一瞬のためらいが聡次郎を襲う。皆が見ている。富士子がああ暗い目をしている。

聡次郎は一気に杯を飲み干した。

一通りの儀式が終わると春治が聡次郎を部屋へと案内してくれた。富士子と辰雄は出かけたようだ。

「辰雄が組長の息子、富士子が妹だったなんて驚いたな」
聡次郎がぼつりと言った。

「知らなかったのか？ それでよく富士子さんを説き伏せたな。大した奴だ」

春治が笑う。

「別に説き伏せた訳じゃないです。通用口でずっと粘っていて、ほかに行くところが無いって言ったら入れてくれたんです。俺の粘り勝ちです」

「粘り勝ちね。それでも大したもんだ。富士子さんは頑固な所があるから。それともよほど同情したのかな？ 気のいい、優しいところもある娘だからな」

「あれですか？ なんだか気の強い奴だと思いました」

「そりゃ、お前の事を心配したんだよ。こんな所をうるついで、まっとうな人生をダメにしたら大変だって誰でも思うさ。しかしまあ、これでお前も華風組の一員だ。昨夜寝てないんだろう？ と、いうよりしばらく風呂にも入った様には見えないな。まずはひと眠りすればいい。風呂を沸かしておいてやるから」

そう言われて案内された部屋に入ると一気に睡魔が襲って来た。

聡次郎はそのまま、泥のように眠り込んでしまった。

目が覚めると春治に風呂を案内され、さっぱりした所で自分の受け持つシマを案内すると言われて、夜の街へ出る事になった。

「俺、いきなり夜に出かけていいんですか？」

聡次郎はつい聞いてしまった。

「ここはそう言う世界だよ。今日は俺がお前を歓迎してやるよ」
そう、春治は笑った。

「久しぶりの弟分だからな、お前は。まあ、新入りはたいてい俺の世話になるんだ」

「へえ……。俺の前にも沢山世話したんですか？」

「沢山つて訳でもないが、俺もついつい世話好きだから組長にも都合がいいんだろう。もう四人も面倒見て来たよ。お前は晴れて五人目だ」

「春治さんが」

聡次郎が言いかけると春治がさえぎって

「ハルでいいよ。みんなそう呼ぶ」

「ハル……さんが面倒見た人で俺の前はどんな人なんですか？」

この質問にハルの顔色が変わった。

「カズヒロ、って奴だ。二年前に喧嘩で刺されて死んだよ」

聡次郎は息をのむ。そうだった。ここはそう言う世界だった。

「だが今日はお前の歓迎会だ。まずは一杯飲みに行こう」
ハルが明るく言う。

聡次郎も余計な事を聞いてしまったのが気になって、少し周りを

見回すと、

「ちょっと待ってて下さい」

と言い残し、少し後ろを歩いていた女性達に声をかけた。

数分後、聡次郎は女性二人を伴って、ハルの前に現れる。

「……驚いたな。お前本当に大した奴だ」

ハルが小声で話しかける。

「……そうでもないですが、俺、道場の仲間内では、こう言う時の調達係だったんです」

聡次郎も小声で答える。

「道場？」

「剣道やってたんです。ガキの頃から」

これを聞いてハルは「ほう？」と言う顔をした。

「それなら後で面白いものを見せてやるよ。楽しみにしてな」と言う。

その後、四人で飲んで食べると聡次郎も酔いが回ってきた。女性達と別れた後は酔い覚ましに夜の街を歩く。

いくらか足に来ている聡次郎を見ながらハルが聞く。

「お前、年はいくつだ？」

「十九……」

「嘘つけ、男がサバ読んでどうするんだ？ 十八か？」

「半年もすれば十九です」

「うちは家風が古いから、色々うるさいところもある。ただそれとは別にこれだけは覚えておけ。人の恨みは買うな。女でも男でも関係ない。この世界で恨みを買って取り返しのつかないこともあるんだ」

「だって、嫌われ者の集りみたいな世界なんじゃないんですか？」
聡次郎は親の葬儀の時の視線を思い出す。

「それと恨みを買うのは全く別だ。うちは前の組長が刺殺されてるんだ。余計な恨みは意外な結果を招く。堅気に迷惑をかけないのもちろんだが、それ以外でも恨みは買うな。これは俺からの忠告だ」

ハルは真剣なまなざしで言った。

刀

翌日、聡次郎は富士子の声で起こされた。台所で朝食を食べると言っている。

どうにか起きて台所に行くと、制服姿の富士子が辰雄に朝食を取らせていた。

「あんた、新入りなのにのんきねえ。明日から早めに起きて事務所の掃除をして頂戴。それから家事も手伝って」

「なんで俺がお前を手伝わなくちゃいけないんだ？」

「昨日ハルさんに言われたでしょ、まずはあたしを手伝うようにって。実際まだ他に出来る事なんてないんだし」

そう言えば昨夜そんな事を言われた気もする。

「とりあえず食べたら食器を洗っておいて。あたしは辰雄を送って行かなくちゃ。文化祭の準備があつて、早く出なくちゃいけないの。昨日は遅刻しているし」

富士子は時計を見ながら少しイライラしていた。すると辰雄が

「聡次郎兄ちゃんに行く」と言いだした。

「……それでいいの？」と富士子が聞いたが

「聡次郎兄ちゃんがいい」ときっぱり言う。

「解った。聡次郎、辰雄を送って行つて。あたしはもう出るから」

俺の意見は関係無しかよ。そう思うものの今の聡次郎に出来る事
と言えば、そんな事しかない。結局富士子に言われた事をこなすし
かなさそつだ。

こうして聡次郎の華風組での生活が始まった。

それでもいざ、生活するうちに、聡次郎の日常はそれなりに充実
してきた。朝の事務所掃除から始まり、日中は辰雄の面倒を見て富
士子の手伝い。組長夫妻は本来組を支えるには若干若い年齢らしく、
その分関係先との良好な状態を保つために色々苦勞も多いらしい。
組長は事務所にも来る日が多かつたし、おかみさんも忙しげに外出
することが多い。今まで家事と辰雄の面倒はほとんど富士子の仕事
だったようで、聡次郎はすっかり、こき使われてしまう。

夕方からハルの手が開けば街のシマを路地の隅々まで案内される。
そして組がかかわる店や、土木関係者に起こりがちなトラブルを説
明され、旨くまとめるためにどんな付き合いが必要かを教えてくれ
た。

最近は麗愛会と言う同じ街にある組織が、華風組にちょっかいを
出しているらしい。

向こうが新興勢力と言うこともあるが、どうやら華風組とは家風
が水と油で会わないことも一因らしい。

聡次郎達が廻って歩いている時も、チンピラに絡まれる。

ほとんどはやり過ぎしたが、ついに喧嘩になったこともある。

その時はハルが簡単にねじ伏せてしまったのだが、聡次郎も軽く身をかわし、すばしっこさを見せつけた。

「いい動きをしているな。さすが、剣道やってただけの事はある」

「ハルさんも強いんですね。腕っ節じゃとてもかなわないや」

「慣れだよこれぐらい。お前もすぐに慣れる、あれだけ動けるんだからな。でも調子に乗って余計な喧嘩は買っくんじやないぞ。人の恨みは買っくな」

「解ってますよ。耳にタコが出来そうだ」

「まあ、そう言っくな。買いたくなくても買っはめになる恨みもあるんだ。それを避けるにはお前はまだ若すぎる。だから余計な事に首を突っ込ませたくないんだよ。そのうち喧嘩は嫌でもしなくちゃならなくなるんだ。あせるな」

そう言ってハルは笑った。

数日たったある日、聡次郎はハルに呼ばれた。

「約束のいいものを見せてやるよ」

そう言っつてハルは聡次郎を階下に案内した。そこには稽古場らしき空間が広がっていたが、奥に並んでいるのは竹刀ではなく木刀だ。

「どうだ？ 振ってみるか？」

ハルが聞いた。そう言えばもう何日も竹刀を握っていない。聡次郎

は喜んで木刀を手に取った。さつそく振ってみる。その様子をハルが見ていた。

「やっぱり筋がいいな。木刀の振り方としてはまだまだだが、すぐにコツをつかみそうだ。これからは稽古を付けてやるよ」

「ハルさんがですか？」

「甘く見るなよ。俺は強いぞ。でも今日ここに来たのはそのためじゃない。約束のいいものを見せてやるよ」

そう言うとハルは奥の小部屋の扉を開けた。

そこにはたくさんの刀が並んでいた。ドス、と呼ばれている短刀もある。

ハルはその一番上にある刀を手に取った。鞘をすらりと抜くと、見事な波紋の刃があらわになる。

「きれいですね」聡次郎が思わず言う。

「うちはドスの手入れは若い奴の仕事だが、刀はなじみの職人に頼んでいるんだ。波紋は刀の出来で善し悪しがあるんだろうが、刀を美しく見せているのはむしろ砥ぎの良さだろう。一流の職人だよ。キレもいい。これからはドスの砥ぎもお前にやってもらおう。命を預ける道具だ。大事に扱えよ」

「解りました」

そう答えながらも、聡次郎はまだうっとりとしている。

「お前には下手な美人よりも、刀の方が効きそうだな」
ハルがそうからかって笑った。

それから聡次郎は、夕方にハルに木刀の稽古を付けてもらうのが日課になった。稽古が終わればあの小部屋でドスを研ぐ。時折あの刀の波紋や砥がれ方と見比べては、自分なりに工夫したりもする。

聡次郎は刀の美しさにすっかり魅了されていた。用が無くてもある部屋へ行き、刀の波紋を見ているだけでも心が躍ってきた。

ハルが「俺は強い」と言ったのは伊達ではなかった。

聡次郎もだんだんと木刀に慣れてきたにもかかわらず、ハルにはなかなか打ちこめない。隙が無いのだ。

「真剣で隙を見せたら命が無いからだ」
と、ハルは言うが、おそらく普通の世界だったら相当な有段者だろう。

この世界にはこんな相手がゴロゴロいるのだろうか？

聡次郎は畏怖を感じるとともに、何か期待するものにもじみ出ている様な気がした。

「俺に打ち込めるようになったら、真剣を振らせてやるよ」

ハルのこの言葉に聡次郎は初めてのご褒美に期待を膨らませる、幼児のような気持で稽古を続けていたが、その日は意外に早くやってきた。

幾度も幾度もハルに跳ね返されていた木刀が、突然、ハルの間合
いの中に入って行った。

聡次郎自身が一番啞然とした。

「偶然じゃないんですか？」

「それは無い。そんな事があつたら、俺はこの世にいないよ」「ハル
も驚いている。

「思った以上にお前は向いているようだ。約束だ、刀を振らせてや
るよ」

その言葉に聡次郎は躍り上がるような気持と、その奥にある何か
ゾクリとする感覚を味わっていたが、あえて気にしないようにした。
それほど刀が恋しかった。

振ってみて驚いた。あまりにもしっくりとなじんでくる。竹刀や
木刀とは比べ物にならない感覚だ。

以前喧嘩で偶然に握った鉄の棒にも近かったが、それよりずっと
重さが身体に同化していく。まるで自分の手の一部のようなのだ。本来
自分の中にあつた物がやっと帰って来たかのようなのだ。

さらに振ってみる。なんのためらいもない。自分の体の一部だつ
たと思えない。

空の切り方、刃先の動かし方、重心の置き方。全てを身体の方が

知っていた。

高揚するのが解る。だんだん手が、刀が熱くなっていく。刀そのものが熱を帯びていくようだ。そしてうつとりとする陶酔感。俺はこんなにも刀が恋しかったんだ。刀を鞘に戻した時には思わずため息が出た。

「驚いた。お前、刀を持つのは初めてだよな？」ハルが聞いてくる。
「もちろんです」

「お前は刀との相性が抜群にいいようだ。ここに来たのも偶然じゃないのかもしれない。いや、これは仕込み甲斐がありそうだ。きつと俺をすぐに追い越すぞ」

ハルの期待が高まっている事がその表情から、聡次郎にも伝わった。

それからの稽古は一層熱を帯びたものになった。聡次郎はもう夢中だ。

そうそう真剣を握らせてもらえる訳ではないが、この動きの一つ一つがあのだ福の瞬間につながるのかと思うと、やりがいを感じずにはいられない。

もっと上達したい。さらに刀と一体になりたい。そんな思いに突き動かされて、聡次郎の腕は上がって行く。

季節が冬を告げる頃、華風組と麗愛会の小競り合いはますます頻繁になって行く。華風組の関係する店や現場に麗愛会の組員が来て

は脅しや嫌がらせを仕掛けて来た。

初めは数人でシマを見回って近づけさせないようにするだけで良かったのが、だんだん人数が増えて来る。

そのうちお互いが集団になり、事が起これば喧嘩が勃発する。そうなるとそれぞれが組から助っ人を呼んで、どちらかが力で抑え込む。そんな事ばかりが繰り返される日々が続いていた。

ついに聡次郎にもそんな喧嘩の助っ人に行く日がやってきた。もちろんハルの手伝いで。

ハルは聡次郎にドスを持たせる。

「いいか、これはあくまでも身を守るものだ。決して相手に刺してはいけない。命を奪うな、余計な恨みを買っんじゃないぞ。お前の腕なら出来るはずだ」

ハルは聡次郎に念を押した。

血祭り聡次郎

いざ、喧騒の中に入ってみると、それまでの小競り合いとは全く違った世界が繰り広げられていた。

皆、何らかの武器を手にしている。ナイフ、刀、ドス、鉄パイプや金属バット。そんな中で殴りあい、切りつけ合いが起こっている。まるで戦争だ。

あれこれ考えている暇などない。刃物をよけ、身をかわし、必死に相手にくらくいつく。鍛えた体と反射神経には自信があったが、若い聡次郎には体格的な不利がある。丸腰ではこっちが危ない。

やむなくハルに手渡されたドスを鞘から抜いて振り回す。間合いも型もない。ただがむしゃらに相手を近づけさせないようにするの
で精いっぱいだ。

それでもしばらくそうしていると、相手も刃物を警戒して簡単には襲ってこなくなる。ようやく聡次郎も落ち着いてきた。

幸い相手は一人、武器はナイフだけ。手の振りは素早いが体格がいい分動きは速くない。間合いの取り方ならハルさんの方がずっと上だ。厄介な手の動きを封じてしまえば何とかなる。刺してはいけない……。

そこまですを確認すると、聡次郎は動きを止めた。相手が先に動くのを待つ。むやみに手の振りに付き合わされるより、向かってくる瞬間を狙った方がいい。

やはり相手は間合いがうまくない。思った以上に無防備に聡次郎に向かってくる。振りかざしたナイフをドスで受け止めると、その指先に斬りつける。相手はナイフを取り落とし、慌てて聡次郎から身を引いた。

他の連中も追っ払われたらしく、気が付くとハルが目の前で手を差し伸べている。

「大丈夫か？自分で立てるか？」

そう言われて聡次郎は脂汗をじっとり掻いたまま、座り込んでいる事に気が付いた。ドスを持つ手が震えていた。

全くみつともない状態で聡次郎は華風組に戻ってきた。汗だけで足は震え、息が切れている。やたらにのどが渴いていた。

それまでの自信も余裕も、すっかりどこかへ消え失せた。

刀が恋しい？冗談じゃない！ドスだけでももうたくさんだ！

そして襲ってくる不安。こんなことでこれからここでやっていくのだろうか？

「最初は誰でもそんなもんだ。初めからこんな事に慣れてる奴なんていないよ」

ハルがいつものように笑う。

「それにお前は俺に頼らなかった。いきなり一人で戦ったんだから、若いのに大した奴だ」

「頼らなかつたんじゃないです。そんな余裕もなかつたんです」
聡次郎はしょぼくれた。

「それでもお前は無事だった。いきなり無茶して大怪我を負う奴だつて中にはいるんだ。お前は冷静に自分の身を守った。それで十分なんだ」

あまり慰めになっていない。聡次郎はそう思いながら聞いていた。

「何よりお前は俺との約束を守った。これで解ったよ、お前は簡単に人を刺したりするような奴じゃない。後は身体が慣れてくれば自然に動けるようになるだろう。きつとお前は心強い助っ人になるよ。保障する。だからそうしょぼくれるな」
ハルはそう言ったが聡次郎にはピンとこない。

それでもしばらく経つと、聡次郎はあの時の事を冷静に振り返るようになっていた。

あの時どう動けばよかったのか、どんなタイミングで斬りつければ相手が手を出せなくなったのか。相手を突っ込ませるにしても、もっとうまく煽っていれば、こっちも消耗せずに済んだかもしれない。

気が付けば頭の中で幾度も分析している自分がいた。現実とは違う。そう自分に言い聞かせてみたが、次はもっとうまくやれる。そんな思いも頭をもたげてくる。

不安と自信の間で揺れる心を聡次郎はハルとの稽古にぶつけた。

今度はこの間のような事にはなりたくない。
そんな思いでいっぱいだった。

次の喧嘩はひと月の間も置かずして起こった。ハルと聡次郎も駆り出される。今度はハルは聡次郎に刀を持たせた。不安げな聡次郎に

「今度は大丈夫だ。今のお前なら冷静にやれる。ただ、約束は守れよ」と言った。

確かに聡次郎は冷静だった。駆けつけた時もむやみに相手にするのではなく、自分に近い体格の者を選ぶ余裕があった。刀を抜いて間合いを取りながら相手の力量を計った。

その時あの恍惚とした陶醉感が襲って来た。自分はやれると言う絶対的な自信。相手に指一本触れさせないと言う自信が身体の中から湧きあがる。

稽古どつりに身体が動く。以前とはまるで違う。その中で聡次郎はまた、あの刀との一体感を味わっていた。相手の動きが読める。どれほど武器を振り回そうとも跳ね返せる。ついに間合いに入った。

刺すな。命を奪ってはいけない。

ハルの声が聞こえた気がした。刀で相手の武器を振り落とさせる。なおも動こうとする相手の肩に刀をぴたりと当てる。

「動くな」

聡次郎は言ったが、相手はさらに武器を拾おうとしている。

「動くなと言っただろう」

腕を軽く斬りつける。それでも相手はひるまない。さらに動こうとする相手の頬に、聡次郎は刀をあてがう。

「これ以上動くと首が飛ぶぞ」

相手の頬から薄く血が流れて行く。ついに相手は引いた。

乱闘はまだ続いている。二人目はさらに素早く武器を手放させる。刀の柄でみぞおちを一突きすると、相手はあっけなく気を失う。三人目は聡次郎の姿を見ただけで身を引いた。

気が付くと乱闘は終結していた。聡次郎はまだ刀の陶醉感に酔っていた。

「良くやった。だから言っただろう？今度は大丈夫だとハルの声で我に帰る。」

「……こんなに違うものだとは思いませんでした」

「お前は動きが全部身体の中に入ってるんだ。身を守る感覚さえ身に着けば、そうは心配することはないと思っていたよ」

「ハルさんの声が聞こえた気がしました。刺すなって」

「そりゃあ良かった。命を大事にできる奴なら、俺も安心して助っ人に来る。お前は強くなるよ」

聡次郎は自分が独特の陶醉感に襲われたことは口にしなかった。それを人に知られてはいけないような気がした。

それからは年の瀬が近づぐことに、喧嘩や騒ぎが起こっていた。ハルと聡次郎も何度も駆り出される。

聡次郎は明らかに腕を上げていた。めったな相手では刀を持った聡次郎にはかなわない事が知れ渡って行く。中には聡次郎の名を聞くだけで、逃げ出すものまで出て来た。

そうなると思マの見回りも聡次郎の大事な役目の一つとなり、夕暮れからの大半の時間は組を出て過ごすようになって来た。辰雄にねだられるので送り迎えだけは続けていたが、富士子を手伝うような暇はすっかり無くなり、残った時間の大半がハルとの稽古に当てられた。そのため富士子とも疎遠になりがちだったのだが、年が明けたある日、富士子が声をかけて来た。

「聡次郎、あんたまた刀を見ていたの？」

聡次郎はむっとした。富士子はいまだに聡次郎を「あんた」と呼んでいる。

「悪いか？」

「悪くはないけど、やめた方がいいと思う」

「なんでだよ」

「あんだ、刀を見ている時は、何となく変なんだもの」

それは最近ハルにも指摘されていた。おかげでドスの砥ぎも任されなくなっていた。だが、富士子に指摘される筋合いはない。

「何を見ていようと俺の勝手だろ」

「そうなんだけど、この頃兄さんや、お義姉さんもあんだの事を心配してるみたいなの」

「俺の何処が心配なんだよ」

「血祭り聡次郎なんてあだ名付けられて、ちよつと天狗になってない？刀取られたらハルさんに全然かなわないのに。そのうち大怪我するわよ」

「ハルさんには刀があってもかなわないよ。そんなの俺の方がよく知ってる。余計な心配だ」

富士子にはそう言ったものの、聡次郎自身、最近は刀を握っている時の恍惚感にのまれていくことにおびえるようになっていた。今ではさらに万能感まで味わっている。殺しはしない、黙って俺のいいなりでいる。そんな事を頭の中で呟きながら刀を振るっている自分に、ぞつとする事さえ、ある。

春が近づいた頃、いつものように刀の保管場所へ足を運ぶと、鍵がかけられていた。ハルに聞くと

「組長がお前にはあまり刀を見せない方がいいと言って、鍵を付け

たんだ。俺もその方がいいと思う」

そう言われると自分への信用の無さにいらいらする。

次の喧嘩が起きた時、聡次郎はまだ、いらいらしていた。その思いが刀を一層熱くさせる。

相手が動く事を許さない。ほんのわずかな動きでも切りつけてやる。黙っていいなりになれ。相手にわざと浅い刀傷を負わせ続ける。まるでシヤチがアザラシをもてあそぶかのよう。

「よせ、聡次郎。もういいだろう」ハルの声で我に帰る。

「聡次郎、お前当分、刀は持つな」
ハルは真顔で聡次郎に言った。

組長の妹

ついに聡次郎は刀を取り上げられた。刀はおろかすべての刃を手にすることを禁じられてしまう。

聡次郎は深い喪失感を感じていた。親を亡くした時は、遺体がそれと解るような状態ではなかったため実感が無かった。葬儀の時は周りの異様な視線にさらされてそれどころではなかったし、親を亡くした実感がわく頃にはここに慣れるのに必死で、感慨にふける余裕が無かった。

しかし今は、刀を取り上げられたことと、この半年の間に夢中で作り上げたはずの自分の価値を失ってしまった事が聡次郎に重くのしかかる。

刀が無ければ聡次郎には何も無い。確かに以前富士子が言った言葉のとおりだった。なのにその刀を取り上げられて、なすすべもなく組長の許可が下りるのを待たなくてはならない。聡次郎には辛かった。

そう言えば最近富士子の姿を見ていない。自分より一つ年下の富士子はまだ高校生だ。登校しているのは解るが、朝は前より早くに出ているようだし、日中も何故か姿を見掛けない。ふと気になってハルに聞いて見ると

「どうやら組長が富士子さんにお前に近付くなと言ったようだ」と教えてくれた。

「まあ、仕方がない。別にお前だからどう、と言っ訳でもないんだ

ろう。もちろんおかみさんや辰雄も大事だろうが富士子さんは、何せ一回りも年の離れた妹さんだ。ほとんど娘も同然だろう。富士子さんは組長にとって最大の泣き所なのさ」

泣き所ね。そう言えば組長は富士子にやや甘いところがある気がする。富士子が平気で年上の俺をあんた呼ばわりするのもその辺のせいかもしれない。

その時聡次郎はふと思った。組長がそれほど大事に思う富士子に、俺が目の前でちょっかいを出したら組長はどんな顔をするだろう。もちろんタダでは済まないのだろうが、俺に刀を持つなと言ったあの顔が歪むのを見てみたい気もする。最初に持つなと言ったのはハルさんだが、あの場にいたハルさんとはともかく、俺のことなどろくに知らない組長に禁じられたのは正直面白くない。

それに、俺が富士子にどうこうするのならともかく、富士子の方が俺に関心を向けるのならさすがの組長も文句が言えないんじゃないか？

……面白いかもしれない。このままいらいらしながら許しを待つのも癪だし、何と言っても自信がある。

そこで聡次郎は辰雄に切り出した。

「今度の日曜に遊園地に行かないか？おばちゃんも誘って」

辰雄は目を輝かせた。当然だ、組長夫妻が辰雄を遊びに連れ出した所など見たことが無い。飛びつくに決まっている。しかし辰雄は不安そうに聞いてくる。

「でも、おばちゃん、兄ちゃんに近付くなってお父さんから言われてるよ」

「知ってるよ、そんなこと。だから朝早くにこっそり出かけよう。おばちゃん以外、誰にも言っちゃだめだぞ」

辰雄は大喜びで伝言を伝えたいらしい。富士子は組長の目を盗みながらも、すぐに飛んできた。

「聡次郎、あんた、なんてこと辰雄に吹き込んだのよ」

「俺は辰雄を遊園地に誘っただけだ」

「なんでそこにあたしが出てくるのよ。二人でいけばいいじゃない」

「俺だって辰雄と二人だけで出かけた事なんかないからな。もし、辰雄にぐずられでもしたらどうすればいいか解らないよ」

「あんた、辰雄をダシに使う気？」

「そう思うのは勝手だけど、辰雄はすっかりその気だぜ。あれで行かないなんて言ったらさぞがっかりするだろうな」

富士子は黙り込む。

してやったり。富士子がカンカンに怒っているのは解ったが、断らないことも解っていた。もし、本当に聡次郎が辰雄だけを連れだしたりすれば、もっと心配になるに決まっているのだ。

日曜日、三人は朝早い時間にそつと組を抜け出した。いつもは朝に弱い辰雄も、今朝はバツチリ目が冴えている。

「この子、昨夜は興奮してひどく寝付きが悪かったの。途中でバテなければいいんだけど」

富士子は心配顔だ。

「だったら途中で昼寝でもさせればいいさ。いいじゃないか、こんなに喜んでるんだから」

そう言う聡次郎も心が浮き立ってきた。最近よくよする事ばかりで気が沈んでいたのかもしれない。そう言えば昼間に行楽で出かけるなんて久しくなかった。

辰雄は夢中になってあれも乗りたい、これもしたいとねだってくる。そのたびに富士子が言った。

「聡次郎と行っておいで」

おかげで聡次郎は辰雄にすっかり振り回される。

広い園内を辰雄に振り回されて連れて歩くだけでも一仕事なのに、辰雄は興奮して走りまわっている。富士子は後ろからついてくるか、ちやっかりベンチで休んでいた。

こいつ、俺に子守を押しつける気だ。

そうは思ったものの辰雄をほうっておくわけにもいかず、結局、辰雄が疲れて寝入るまで聡次郎は振り回され続けてしまった。

遅い昼食を終え、辰雄が疲れて眠る頃には聡次郎も疲れ果てていた。

「こいつこんなに体力あつたけ？」

ため息交じりに聡次郎は聞いた。

「今日は朝からずっと興奮してたからね。まあ、興奮させたのはあんただけど」

「お前、わざと辰雄を押しつけてただろう」

「あれだけ興奮してたら、本気で付き合ってたらこっちが持たなくなるからね。辰雄の世話はあたしの方が慣れてるの。これに懲りたら二度と辰雄をダシに使うのはやめる事ね」
と、富士子はぬけぬけと言う。

「お前かわいげがないな。そもそも俺をあんたって呼ぶのやめろよな」

「あんだって、あたしをお前って呼んでるじゃない」

「俺はお前より年上だぞ」

「たった一年じゃないの」

「それでも年上だ。お前、組長の妹だからって、目上の男達にちやほやされて生意気になってるんだよ」

「……あんたは何にも分かってないのよ。組の事も、この世界の事

も」

「解ってるさ。組の中で守られてるお前よりは」

聡次郎は突っかかった。いい加減疲れて気が立っていた。

「いいか、一度喧嘩に飛び出せばこっちは命懸けだ。身体張って生きてるんだ。お前は俺を刀だけのやつと思ってんだろうが、そこいらのやつより鍛えてる分よっぽど力があるんだぜ。お前は男の怖さなんか知らないだろう」

そう言っつて聡次郎は富士子に近づいた。

「あんまり人を馬鹿にするなよ。俺だつて男だ。舐めて甘く見てるとしまいにゃ襲うぞ」

しかし富士子は動じなかった。聡次郎の苦手なああの目で睨み返してくる。

「やれるもんならやってみなさいよ。あたしを誰だと思ってるの？ 目の光が強くなった。

「華風組組長の妹、華風富士子よ。このあたしに手出ししようってんなら、それなりの覚悟があるんでしょ？ あたしを敵に回すなら、組を敵に回すと同じ事よ。それほど惜しくない命ならこっちだつて容赦しないわ。身体を張ってる？ 笑わせないで。組長一家を守りもしないでなんのための組員よ。そっちこそ舐めんじやないわよ！ あたし達は伊達で華風の看板しよって生きてんじやないんだよー！」

聡次郎は絶句した。まさか十八の少女にこうまで見事に啖呵を切られるとは思っていなかった。さすがは組長の妹。腹の座り方がま

るで違う。考えが甘かった！

後悔先に立たず。富士子はまだ睨んでいる。聡次郎はため息をついた。

しばらくしてようやく富士子も視線を切った。

「もう帰らない？ 辰雄も眠っちゃてるし」

「……そうだな」

聡次郎も同意した。すでに精も根も付きていた。富士子が啖呵を切った時点で。

組に帰る途中の道でハルが三人を待ちうけていた。

「三人とも何処に行ってたんだ？ 組長がカンカンだぞ」

「ばれてるんですか？」

聡次郎が聞いた。

「当たり前だろう。三人そろって姿を消せばばれるに決まってる。

富士子さんは辰雄君を連れて、急いで帰った方がいい。聡次郎、お前は俺に付いてこい。少し時間をおいた方がよさそうだ」

そう言われて富士子は慌てて眠った辰雄を背負いながら帰って行く。ハルは聡次郎を近くの喫茶店に連れて行った。

「お前どういうつもりだ？ この間言っただけだろう。あれじゃ

富士子さんが可哀想だ。今頃組長から散々説教されているはずだ。誘った女にツケの尻拭いをさせて、情けないとは思わないのか？」

いきなり説教されて、聡次郎は慚然とする。

「俺達は遊園地に行ったただけだ。組長にどうこう言われる事じゃない」

「そんな言葉が通用する訳ないだろう。とにかく二度と黙って姿を消すような真似はしないでくれ。俺だつてかばいきれないこともあるんだぞ」

ハルがため息をつきながら言った。

「で、どうだつたんだ？」

ハルが間をおいて聞く。

「何がです？」

「富士子さんだよ。少しは仲良く……なつた顔には見えないな」

「なんであいつ、普段は暗そうにしてるくせに俺には強気で食つてかかるんだか」

「まあ、こんな世界で暮らして来て明るくなれと言う方が無理だろう。そもそも気が弱くちゃやっていけない世界だ。あの娘はいい娘だよ。そのうちお前にも解るだろう」

「いや、結局あいつ、俺の事を舐めてかかっているんだ。今に見てるよ。絶対に落してやる」

それを聞くハルが「やれやれ」と言う顔をした。

本音

「俺は富士子を絶対に落してみせる」

聡次郎はハルにそう言っただけで組長に宣戦布告を告げた様な気分になっただけだ。

あの後富士子は組長によほどきつく言われたのか、はたまた聡次郎が気に入れないのか、全く姿を見せなくなってしまっている。

そうなるに聡次郎も意地になって、何が何でも富士子を誘いださうと躍起になってあれこれ手を打ってみる。

まずは富士子が朝家を出る所で声をかけるが、肝心の本人が視線の一つも合わせない。

身近な組員に伝言を頼んでも返事が来ない。

学校帰りの友人に声をかけ、さらには富士子の前で友人の方を誘って見ても、まるで無視される。

それならばと辰雄を使って呼び出すとさすがに飛んでは来たが「二度と辰雄を使わないで」と言っただけで部屋へ戻り、聡次郎の鼻先で扉をびしゃりとしめる始末。

それでも部屋の前で粘っていると、いつの間にか組長がそばに立っている。

八方ふさがりの状況にさすがの聡次郎も手も足も出なかった。

それをあの組長がほくそ笑んでいると思うと、聡次郎は腹ただしくて仕方がない。

そのうちに富士子のことと気が紛れていた、あの、刀を持ちたいと言う感覚が再び聡次郎を襲って来た。

深い喪失感の後に湧きでた渴望感。

刀を握りたい。あの至福の時間をまた味わいたい。もう一度あの世界に酔ってしまいたい。

誘惑は日に日に強くなっていく。

そして季節が変わって夏祭りの時期がやってきた。人々は祭りの準備に追われ、街が活気づいて行く。

街の喧騒が高まる中で興奮に煽られるようにして、準備のさなかに今までで一番大きな喧嘩が起った。

当然聡次郎達も駆り出されるが、刀を持たせては貰えない。

聡次郎の怒りは頂点に達していた。刀の事、組長の事、富士子の事。何もかもが気に入らない。そんな中での乱闘に、聡次郎は憂さを晴らさんとばかりに暴れ回る。

自分が身を守るものを何も持っていないことなど頭には無かった。ただがむしゃらに暴れるだけだ。ハルの事も目に入らない。体中に傷を負いながらも聡次郎は暴れていた。

ついに聡次郎はハルに抑えつけられた。

「よせ！聡次郎。殺すつもりか？」

気が付くと聡次郎はぐったりした相手の頭に、イスを投げつけようとしていた。全身の力が一気に抜ける。

聡次郎は傷だらけで帰って来た。幸い大きなけがはなかったものの、組長は聡次郎が全く身を守ろうとしなかった事をかなり問題視していた。

「だったら刀を持たせて下さい」

聡次郎はついに懇願した。今は組長に対する意地よりも、刀への恋しさの方が勝っていた。しかし組長はそれを許さなかった。

「いや、それはダメだ。今のお前に刀を持たせたら、身を守るところか何が起こるか解らない。お前は当分喧嘩に出るな。シマの見回りにも行かなくていい」

と言って、組長は取り合わない。さらには

「俺もお前を出ない方がいいと思う。お前に刀を持たせたのは俺の失敗だったのかもしれない」

と、ハルも同意した。

組長だけでなく、ハルさんまで！

その日、聡次郎は荒れていた。一人、稽古場で木刀を振りながら

叫び続けた。

ハルが自分に刀を持たせた事を後悔しているような事を言われた事は、大きなショックだった。

たとえ組長が禁じようとも自分に刀を持たせ、教えてくれたハルならいつかは組長を説得して、刀を持たせてくれるだろうと聡次郎は思っていた。それなのに裏切られたような気がした。

どんなに吠え、叫び、猛っても気持ちの収まりが付かなかった。

不意に人の気配を感じる。 富士子だ。なんでこいつはこんな時に限って姿を現すんだ？

「なんだよ。こんなところで俺に会ったりすれば、また叱られるぞ」

「少し、静かにできない？ 辰雄が脅えてる」

「そうか、悪かった」

聡次郎はため息とともにその場に座り込んだ。

「今日は素直なのね」富士子が言う。

「素直じゃないのはお前の方だろう？いつも生意気な口ばかり聞いて」

「生意気ついでに言わせてもらっわ。あんだ、この世界向いて無い。組を辞めた方がいいかもしれ無い」

「なんだって？」

「あたしも、ずっと後悔してたの。あの時あんたをここに入れた事を。いつそ辞めたら？そうすれば喧嘩もないし、刀の事でいらいらすることもなくなるわよ」

「……冗談も大概にしるよ」

聡次郎は立ち上がった。そのまま富士子に詰め寄る。

「今更何言ってるんだよ。俺にここ以外の何処で生きろって言うんだよ」

「真面目にやればどうにでもなるんじゃない？あんた、まだ若いんだし」

「若いから、余計、どうしろって言っただよ。両親もいない、親戚からは煙たがられる。学校もろくに出ていない。帰る家さえない。これでどうやって生きて行けって言っただよ。言っただろう？他に行く所なんて無いって」

だんだん声が大きくなる。怒りがこみ上げてくる。

「だったら、刀持つだけでもやめたら？あんたがおかしくなるのは刀を持つからなんだから」

「刀も持たず、喧嘩もしないで、どうしてここにいられるんだよ。大体ハルさんもハルさんだ。俺に刀を持たせておいて、こういう生き方を教えておいて、今更取り上げるなんて。お前なんか解るも」

んか。いつも組員に守られてぬくぬくと暮らして」

やつあたりだ。解っているが止められない。

「刀なんか持たなくたっていいじゃない。喧嘩だけしてればいいつてもんじゃないでしょ。人を傷つけて何処が面白いのよ！」

「面白い訳無いだろう！ こっちだって好き好んでやってる訳じゃない。身を守るためだ！」
思わず怒鳴る。

「俺だって戻れるもんなら戻りたいさ！ここの裏口に張り付いてた時に。でも、もうどうしようも無いじゃないか！」

向いて無い。漠然とだが自分でもそんな気がしていた。そこを突かれて頭に血がのぼっている。怒りにまかせて掛け値なしの本音が出た。

戻れるものなら戻りたい。でも、もう何もかもが遅すぎる。

「人をこんな世界に引っ張り込んでおいて、辞めろだなんてその口で二度と言っただけ。今度こそ本気で襲うぞてめえ！」

そう富士子を怒鳴りつけた時、驚いた事に一瞬だが富士子が身を固くしたような気がした。

これまで何を言っても動じなかったのに。思わず聡次郎は黙り込む。

しばらくして富士子が口を開いた。

「なによ。引っ張り込んだだの、守られてるのって。だからどうしたっていうのよ」

ああ、またあの目の色だ。聡次郎は富士子の目を見ながら思う。

「ハルさんも、兄さんも、お義姉さんも、あたしだって、どんなにあんたを心配しているかちつともわかって無いじゃない。組員はね、家族なの。ましてあんたは一番若い新入りだし、心配されて当たり前じゃない。だからみんなあんたの事に必死なのに、肝心のあんたは刀がどうの、兄さんがどうの、ハルさんがどうのって」
富士子が睨む。

「行くところが無いのはみんな一緒よ！だからみんな組を守る事を考えて生きてるのに、あんなだけじゃない、人にあたり散らしてばかりいるのは！」
そう言いながら富士子は後ろに身を引いた。

「辞めたくないなら、それでもいいわよ。でもこのままじゃ、あんたは組のお荷物よ。少なくとも頭に血がのぼるのは自分で何とかしなさいよ。じゃなきゃ、一生刀なんて握れないから」
そう言っって背中を向けようとする。

聡次郎が思わず手を伸ばそうとすると

「近寄らないでよ！」
と、その手を払いのける。

「聡次郎なんて大つきらいよ」

そう言つて富士子は稽古場を出て行つてしまった。

大つきらい。そこまで言われるとは正直思つていなかった。自分も力ツカしていたが、富士子の方も相当頭に来ていたらしい。

それにしても富士子はなんであんなに怒つたんだらう？

そもそも組を辞めろと言ひ出したのは富士子の方だ。脅しをかけたのが怒りの原因とも思えない。

このくらいの脅しならこれまでも言つていたし、富士子はかえつて立ち向かつていた。

ここへ引つ張り込んだと言つのがそんなに気に入らなかつたのか？ だけどそれは本当の事じゃないか。まあ、俺も勝手に押しかけて来た訳だが。

それに俺だつて好きでここに来たわけじゃない。そのくらいの事あいつだつて解つてくれてもいいじゃないか。あいつこそ俺の事なんてまるで解つちやいないんだから。

ここまで考えて慌てて聡次郎は思いなおす。

なんであいつなんか解ってもらわなくちゃならないんだ！

涙

それからしばらくの間、聡次郎と富士子は口もきかずに過ごしていた。腹ただしいのもあるが、何より二人の間が気まづくなってしまうっていた。

聡次郎は刀に触れられないからだちと、それまでの自信がいつペんに失われた事に意気消沈していた。

「このままじゃ組のお荷物よ。頭に血がのぼるのは自分で何とかしなさい」

富士子に言われた事が頭の隅に引つ掛かっている。だが、具体的にどうすればいいのかが解らない。

冷静になろうにもあの感覚が襲ってくる限り、自分に自信が持てないのだ。

誰かに……ハルに相談したいのは山々だが、この間の事もあってどうも素直になりにくい。

聡次郎は悶々とした日々を送った。

それでもひと月もたつと、富士子と口を利かずにいるのも疲れて来た。いい加減あやまったほうがいいかもしれない。そう思って聡次郎は学校帰りの富士子を捕まえる事にした。

口を開けば喧嘩になるかもしれないが、今の気まづいままにいる

よりはずつといい。向こうから謝らないかと思っただが、あの頑固者が簡単に折れるとも思えない。それにあの時は言いすぎたとも思うし。

女の頑固さは始末に負えないな。

そう思いながらも、聡次郎は組の近くで富士子の帰りを待っていた。

通りの向こうに富士子の姿が見えた。だが、その反対側に見覚えのある風体の男の姿が目につく掛かる。すぐに思い出した。夏の喧嘩で聡次郎がイスを投げつけようとした相手だ。一瞬だがその手の中に光るものが見える。あいつ、富士子を襲う気か！

聡次郎は全力で駆け出した。頭に血がのぼって行くのが解る。こいつただじゃおかないぞ。相手に殴りかかろうとしたその瞬間

「やめろ！聡次郎」

ハルの声が聞こえて、聡次郎は慌てて手を止めた。男と聡次郎の間にハルが割って入る。ハルが左手を前に出しながら反対のこぶしで相手を殴りつける。男はそのまま逃げていく。

「ハルさん！」

富士子の悲鳴のような声が響く。

ハルの左腕には深々とドスが突き刺さっていた。

ハルを急いで病院に連れていき、治療を受ける。傷は浅くはないが大事には至らなかつたらしい。それでも治療に時間がかかるらしく、ハルはなかなか処置室から出てこなかった。

その間富士子はずっと泣いていた。いつまでたってもしゃくりあげている。

「いつまで泣いてるんだよ。そんなに怖かったのか？」
聡次郎が声をかけた。

富士子は黙ってうなずく。

「お前は大丈夫だよ。俺たちみんなが守って……」

「違うの。そんな事じゃない」
泣きながら富士子がさえぎった。

「さっきはあんたやハルさんが、お父さんみたいな事になるかと思
った」

富士子の目から一層涙が流れる。

そう言えば富士子の父親、前の組長は刺殺されたって聞いてたっ
け。

「ハルさんなら大丈夫さ、あれだけの腕の持ち主だ。俺をかばった
んでなけりゃ、とっくにかわしていたはずさ。俺だつてめつたなこ
とじゃやられない。喧嘩だつて負けない」

「そんなの関係無いわよ。お父さんの時もみんな大丈夫だつて言っ
たわ。みんなも身体を張って守ってくれた。さっきのハルさんみた

いに」
富士子はまたしゃくりあげる。

「それでもお父さんは、あたしをかばって……」
富士子の言葉が途切れると、今度こそそのまま泣き崩れてしまう。

確かに組長ともなれば、誰より守りは固いはず。先代も用心していたはずだ。にもかかわらず富士子の父親は殺されている。今の話振りだと先代は富士子をかばって刺されたようだ。

さつきハルさんは俺をかばって怪我を負った。あの時、何かの拍子でハルさんが死んでしまっていたら。

聡次郎は背筋がゾクつとした。病院の廊下がやけに寒々しく感じる。

「俺たちみんなが守る」
自分が今言った言葉の軽さに驚く。富士子が組長の泣き所なのは周知の事実だ。またいつ、今日のような事があっても不思議じゃない。

こいつはいつも、こんな恐怖と闘っていたのか？

再び富士子は口を開く。

「あんた達はこうやって腕ぐらい平気で差し出すのよ。だけどあたしは平気じゃいられない。喧嘩に勝ったからってどうだっていうの

よ。最後はただの殺し合いじゃない。あたし達は組を、あんた達が帰る所を守りたいだけなのに」

富士子は涙を流しながら苦しげに話す。

聡次郎は泣き続ける富士子の頭を自分の肩に押しつけた。

「……………何すんのよ」

富士子のくぐもった声が聞こえる。

「なんにもしねえよ。こんな時に。さつきは俺も軽率だった。この間も悪かったよ。ぬくぬく暮らしてるなんて言っただけ。俺だって八ルさんに守られてたのに」

「いいわよ。本当の事だし。あんた達がいなきゃ、あたしたちは生きていけないんだから」

それから二人は黙ったままだった。富士子は聡次郎の肩で泣き続けていた。

聡次郎は自分が飛び込んだ世界の残酷さを、初めて少し、垣間見た気がした。

それでも富士子はようやく泣きやむと「ありがとう」とだけ言って、肩から離れた。そのままトイレに向かう。顔を洗ってくるのだろう。

気が付くと治療を終えたハルが立っていた。

「ハルさん、すみませんでした」

聡次郎は頭を下げた。

「お前が謝る必要はないよ。今日は富士子さんに優しくしてたじゃないか」

ハルはいつもどおりに笑う。

「見てたんですか？」

「こんな治療にそう、長くはかからないよ。良かったじゃないか、仲直り出来て」

「人が悪いな」

「まあ、そう言うな。このところ二人とも元気が無いから心配していたんだ。またあの元気な口げんかを聞かせてもらわないと」
そう言うってハルは、聡次郎の肩をたたく。

「そう言えば前に富士子さんを落とすと息巻いていたが、落とされたのはどっちだろうな？」

そう言うってハルは戻ってきた富士子に手を振って見せた。

翌日、聡次郎が事務所の掃除に行くと、富士子が先にいて掃除をしていた。

なんでお前がここにいるんだよ

そう聞くのも何だか野暮な気がして、そのまま二人で黙って掃除を続ける。しばらくして聡次郎はようやく声をかけた。

「悪かったな。今までの事も、この間の事も。つまらないやつあたりをして」

「この間はあたしも言いすぎたから。あんただって好きでこんなところに来たわけじゃないんだし」

少し考えて、聡次郎は答える。

「いや、やっぱり俺は自分でここを選んだんだと思う。心のどこかで憧れていたのかもしれない。あの時、本当に他に行きたい所が無かったんだ。だからあそこで待つていられたんだ」

「あのままもし、あたしが戸を開けなかったら？」

「多分ずっと待つてたと思う。何日でも。お前が開けてくれるまで。だからお前は戸を開けたんだろ？」

「そう、かもしれない」

「なのに俺には覚悟が足りなかった。ハルさんみたいな。俺のために飛び出してくれたハルさんみたいな覚悟が足りなかったんだよ。ここで生きる覚悟が」

「他の道じゃダメなの？」

「それもあるのかもしれない。でも、刀がいるとかいらなとか、組長やハルさんがどうとか、そんなことは関係ない。そんな事になだわってたから、自信が無くなったんだ。ここは俺が選んだ場所なんだよ」

そうだ。あの時、ほかの大人に泣きつくことだって出来なかった訳じゃないはずだ。それでも俺はここを選んだ。

「それにここには、組長がいて、おかみさんがいて、辰雄がいて、ハルさんがいて、お前がいるんだ。俺、他のどこよりもここが好きなんだよ」

「でも、言つとくけど辛い世界だよ」

「それでも俺は選んだんだよ。お前のせいじゃ無かったんだ。俺、親から逃げてたら親の方が死んじまった。親類からも逃げた。でもここは違う。自分の足でここに来た。なのに逃げ道ばかり探してた。だから苦しかったんだ。お前、組員は家族だって言つたよな？俺には向いて無いかもしれないけど、ここの家族でいたいんだよ」

「わざわざこんな世界を選ぶんだね。でも」富士子が掃除を終えて、道具を片づけながら言つ。

「ありがとう。この組の事を家族と言つてくれて」
富士子が笑つ。

「昨日から礼ばかり言つてるな」
聡次郎も笑つた。

「お礼くらい言えるわよ。ハルさんも早く良くなるといいね」

「そうだな」

そのまま富士子は事務所を出ていった。

ハルさんか。いい人だよな。組の事を思っていて。俺の世話まで焼いてくれて。

ハルさんには何でも見破られてる。ああそうだよ、落とされたのは俺の方だよ。結局俺は富士子が好きなんだよ。だからあいつの言う事にいちいち突っかかりたくなっただ。

ハルさんにはとっくに解ってたんだ。きっと。

その時聡次郎は思った。

そう言えば……。

昨日、富士子はハルさんの事で随分動揺してたな。ずっと泣きっぱなしだったし。

この間の喧嘩の時も、俺がハルさんをなじったら余計に怒った気がする。

ハルさんは長くここにいるみたいだし。

そしてふと、考える。

ひょっとして、富士子は、ハルさんに気があるんじゃないか？

嫉妬

富士子はハルさんに気があるかもしれない。

そうやって考えてみると、聡次郎には思い当たる節がいつぱいあった。

昨日の事もそうだし、普段から忙しい組長よりハルさんの方が富士子も頼りやすいみたいだし、世話好きのハルさんも富士子の事は良く気にかけているようだ。

喧嘩の時もハルさんの名前が出て来たし、ハルさんは家族も同然な口ぶりだった。

そう言えば自分がここに来た時、富士子が説得に行つて最初に迎えに来たのもハルさんだった。

少なくとも富士子にとってのハルさんは、兄の組長に負けないくらい頼りになる男って事なんだろう。

ハルさんは男らしいし、優しさもある。何より面倒見が良くて、組長からの信頼も厚い。それにいつも良く笑っている。

男だつて愛想が悪いよりは良い方がいいに決まっているし、何よりハルさんの笑顔は人柄を現して見ているこつちがホツとする。

それに顔立ちだつて悪くない。

自分も容姿には多少の自信があつたが、ハルさんはしまりのある

男顔で、俺は母親に似て女顔だ。

なんで母親に似たんだ、俺は。

やっぱり富士子は男顔の方が好みなんじゃないか？どうもそんな気がする。

ハルさんは男顔で頼りになる大人の男だ。俺はいつも一緒にいたから四六時中比べられていた訳か。

どおりで何をやっても富士子がなびかなかった訳だ。そもそも器が違いすぎる。

おまけにハルさんは腕っ節も強い。昨日だってちゃんと俺達を守ってくれた。刀の腕でも俺はハルさんにまるで追いつけずにいる。

ハルさんは「お前はすぐに追い抜く」と言ってくれたが、未だにずっと遠くにいるハルさんを追いかけている様な気がする。

「このままじゃ組のお荷物よ」富士子の言葉が蘇る。

本当にそうだ。このままじゃ組を守れない。むしろ足を引っ張っている。富士子を襲った男だって、俺が相手をした奴だった。頭に血がのぼってやり過ぎた、あの時の恨みをきつと根に持っていたんだ。

「余計な恨みを買っちなよ」

俺はハルさんの言葉を守れなかった。組を、富士子を守るどころかかえって危険にさらしてしまった。

少しばかりの刀の腕で、組を守っている気になっていたが、俺はハルさんに守られているだけで、結局何にも守れちゃいないじゃないか。

このままじゃいられない。聡次郎に危機感が走った。慌ててハルを捕まえる。

「ハルさん、教えてほしいんです。俺がどうすればいいのか。自分を抑える方法が知りたいんです」

「刀を持たない事じゃダメなのか？」

「それじゃ、ダメなんです。刀を持たなくなっただって、この間のような事が起こる。それじゃ、組の足を引つ張るだけです。このままじゃ、俺、ここにいられなくなります。ここを出たくないんです。ここで生きる覚悟を決めたんです。組を守るようになりたいんです。お願いします」

聡次郎は頭を下げた。最後は懇願だった。自信などとっくに失っていた。自尊心さえかなぐり捨てた。

「富士子さんを守りたいんだな？」

ここで、この人から富士子の名を出されるのは辛い。それでも、それでも。

「守りたいんです。組も、富士子も」

「一つだけ方法があると思う。うまくいくとは限らないがハルはため息交じりに言った。

ハルは聡次郎を稽古場へと連れて来た。そして刀を持たせる。

「いいんですか？俺が刀持って」

「真剣でなけりや意味が無いんだ。俺にはお前が何故こつまで刀に惹かれるのかは分からない。ただ、本来お前は簡単に人を切り刻むような奴じゃない。ましてや刺したりするような奴じゃない事は解つてる。それでもお前は刀にのまれてしまう。何故だと思つ？」

「俺が冷静じゃないから……」

「そんなの俺だって同じだ。人を傷つける道具を持ってまともでいられる方がおかしい。お前がのまれてしまうのはおそらく恐怖心からだ。それを克服しないまま命の取りあいをするから、陶酔感でごまかそうとするんだろつ。それにお前はやけに刀と相性がいい。動きも身体に入っている。だから動きにはいつも余裕があるが、心の方は一杯一杯だ。それで心が楽な方へと流されるんだ」

言われればなるほどと思う。この人はここまで俺を見抜いていたのか。

「じゃあ、俺の頭にすぐ血がのぼるのも」

「もともとの気性もあるんだろつが、恐怖心を興奮でごまかそうとするとところもあるんだろつな」

恐怖心。

自分がハルを死なせていたかもしれないと考えたあの時。身体が凍るような恐怖が走って行った。富士子はそれに耐えて暮らしているが、俺は楽な方へと逃げています。人を傷つけてでも自分が酔うことの方へと流されていく。

「だから俺はお前に恐怖を教えようと思う。逃げ場のない恐怖を」

「え？」

「これから俺はお前を本気で斬りに行く。だからお前も本気で向かわなければならぬ。恐怖心に打ち勝つんだ。ただしお前は俺を斬ってはいけない。かすり傷一つさえもつけてはいけない。どうだ、出来るか？」

「俺が？ ハルさんに？」

「これをしてやれるのは今の俺だけだ。今ならお前に斬らせずに済む」

「そんな！ 俺がおかしくなつてハルさんに斬りかかったら」

「そうならないために訓練するのさ。大丈夫だ。俺はお前に斬られないよ。ただし、お前に隙があれば俺はお前を斬るかもしれない。お前は手加減できるような相手じゃないからな。お前が本当に俺を上回ったら……それでもお前が自分を抑えられなかったら……そんな事は無いと思うが、その時は刀を持たせた俺の責任だ。喜んでお前に斬られてやるよ」

「本気で斬りあいをしるって言うんですか？ ハルさんを相手に」

「そこね」

「だってハルさんは今腕が……」

「腕の事は気にしなくていい。このくらいじゃお前にはやられないよ。どうする？ 他に方法が無いぞ。これだってうまくいくとは限らないんだ」

聡次郎はためらった。一步間違えば本当にどちらかがタダでは済まなくなりそうだ。ハルの腕前は良く知っているが、真剣を直接交えた事は無い。

「このままじゃ、組も富士子さんも守れないんだろう？ やるのか？ やらないのか？」

何故だろう。何だかハルさんに挑発されている様な気がする。

「やります」

「よし、じゃあ始めよう。手は抜くなよ」

そう言ってハルは聡次郎に向かってかまえた。

ハルと真剣を交えるのはこれが初めてだ。しかもハルは今、片腕が使えない。これはかなり無謀な事なんじゃないのか？ 聡次郎に不安がよぎる。

間合いを取る。距離感をつかむのは木刀の時となんら変わらない。それでも聡次郎の目の片隅に、ハルの包帯の白さがまぶしい。気を取られる。

ハルが動いた。聡次郎もよけようとしたが一瞬遅い。気が付くとハルの刀の切っ先が聡次郎の目の前にあった。そのままハルに突き飛ばされる。

「バカ野郎！ 手を抜くなと言っただろう！ 死にたいのか！」
ハルが怒鳴る。

「今度こんな真似をすれば、その目玉をくりぬくぞ」

ハルの言葉に聡次郎に戦慄が走る。背中に冷たい汗が流れていく。初めてドスを持たされた日を思い出す。

「これは命の取りあいだ。お前はその中で恐怖をマヒさせた。だから同じ状況でやらなければ意味が無いんだ。どうする？ やめるか？ 富士子さんを守るんじゃないのか？」

「やります」

聡次郎は即答した。

想像はしていた。しかし、真剣を握ったハルがここまで強いとは思わなかった。木刀の時の比ではない。もうハルの包帯の白さも気にならなくなった。いや、そんな余裕は微塵もない。

だんだん呼吸が荒くなる。いつものように刀が熱を帯びてくる。し

かし陶酔している暇はない。恐怖が襲ってくる。そこから逃れたくてハルの隙を探る。踏みこむが跳ね返される。その間隙をぬって刃が襲ってくる。また恐怖する。永遠のような繰り返し。

長く、長く感じたが、おそらく十分にも満たずに二人は斬りあいをやめた。

「今日はここまでだろう。お互いに限界だ」
そう言うハルの息も荒い。

「これを毎日繰り返そう。お前の精神が持つならばだが」

確かにこれは精神的にはかなり辛い。毎日繰り返した時に心が持つのだろうか？

おまけにハルは明らかに聡次郎を挑発している。わざと富士子の名を引く張り出している。解っているのに頭に血がのぼって行く。何故こうまでハルが聡次郎を挑発してくるのは解らないが、意味の無い事とも思えない。

しかしこんな事を繰り返していたら、本当にどこかでハルを斬ってしまうのではないだろうか？

そう思いながらも聡次郎はハルとの稽古を続ける。

他に方法が無い以上、ハルを信じて続けるより他に無いのだ。

ぐったりしながらも、幾日かの日々が過ぎると、とうとう富士子が感づいてきた。

「あたとハルさん、稽古場で何やってんのよ」

「稽古だよ」

「普通の稽古じゃないわね？」

「そうだな。でもやらなくちゃならない事なんだ」

ハルさんと斬りあいをしている。下手をすれば俺がハルさんを斬るかも知れない。

そう思うと、とても富士子の顔を真っ直ぐには見れない。そんな事になったら富士子は俺をどう思うだろう？

「ハルさんが俺を信じてやってきている事なんだ。俺、答えない訳にはいかないんだよ」

そう言って聡次郎は富士子に背を向けるより、どうしようもなかった。

光

ハルとの特別な稽古も八日目を迎えていた。聡次郎の感覚も研ぎ澄まされてきた。

時折ハルが聡次郎の間合いに入りにくくなってきているのが解る。聡次郎もハルに距離感をつかませないように、細心の注意を払う。すると、わずかだが余裕が出てくる。何処から攻めようかと一瞬考えを巡らせる。

その時ハルがささやいた。

「ガキだな」

カツと血がのぼる。一気に斬りにかかっていなされる。返すハルの刀が聡次郎の喉もとでぴたりと止まった。

「今日のもういい。明日にしよう」

そう言われて聡次郎はぐったりと座り込む。

「ハルさん、せめて挑発するのはやめてくれませんか？」
聡次郎がたまらず言った。

「お前、俺が相手で気が緩んでないか？本気で斬りあう相手が黙っていてくれるのか？俺はお前の腕試しをしている訳じゃないぞ」

「違つんです。怖いんですよ。本当にハルさんを斬りそうで」

「俺は斬られないよ。そう言っただろう？それに本当にお前が俺を上回ったのなら、喜んで斬られてやるさ」

「……もし、俺がハルさんを斬ったら富士子に恨まれます」
聡次郎がぼそりと言う。

ハルは少し驚いた様な顔を見せたが

「お前は俺を斬らないよ。それは大丈夫だ。むしろ俺がお前に傷を負わせれば、富士子さんが泣くだろう。何度も言っただろう？お前は簡単に人を斬るような奴じゃないんだ。ただ、感情が追いついていかないだけなんだ。もっと冷静に自分を見た方がいいぞ」

「違う！」

聡次郎は叫んだ。

「正直、俺、ハルさんが羨ましいんです。俺が持つてないものを全部持つてて、俺よりずっと大人で。悔しくて本当に勢いで斬ってしまっそうだ」

聡次郎が苦しそつに言う。

ハルはしばらく聡次郎を眺めていたが

「それなら斬ってみろよ、聡次郎」

「え？」

「そんなに悔しいならやってみろって言うてるんだ」

「ハルさん」

「俺の何がそんなに羨ましいんだ？ 刀の腕か？ 腕っ節か？ 年

上だからか？」

ハルが切っ先を延ばしてくる。聡次郎を挑発する。

「それとも富士子さんの事か？」

「ハルさん」

「お前じゃ、誰も、守れない」

聡次郎も刀を取る。ハルに向かう。振りかぶる。

ハルは微動だにしない。

聡次郎が刀を振り下ろす。

そして刀を止めた。

ハルは聡次郎を見てほほ笑んでいた。

「そらみる。お前は簡単に人を斬るような奴じゃない。ましてや嫉妬に狂うような奴でも無いんだ」
いつものように笑う。

「お前はもう大丈夫だよ。これで稽古は終わりだ」
そう言われて、聡次郎は啞然とした。

「俺、もう大丈夫なんでしょうか？」

聡次郎の言葉にハルは真顔になった。

「正直なところ、本当の乱闘になった時にお前がどうなるのかは俺にも解らない。それでもお前はもう、刀にのまれているようには見えなかった。今はそれで十分だろう。お前も陶酔感を感じなかったんだろう?」

「たしかに感じませんでした」

「なら、それでいいんだ。しかしお前もつまらない嫉妬をしたもんだ。富士子さんはお前が心配なんだよ。今もきつと戸口に張り付いてる」

「富士子が?」

「お前もいい加減、鈍いな。なんで俺が刀の部屋の鍵を持っていると思ってるんだ? 富士子さんがこっそり俺に渡してくれたからだ。富士子さんが頻繁にお前に声を掛けられたのも、おかみさんが組長の目を盗んでお前の近くにいさせたからだよ。おかみさんにそうさせるほど、富士子さんはお前を心配してるのさ」

富士子が? 俺を? そこまで心配している?

聡次郎の心に、一筋の光が差し込む。

その時、その富士子が稽古場の戸を開けた。深刻な顔だ。

「兄さんがハルさんと呼んでいます」

「喧嘩か？」

富士子は黙ってうなずく。

「解った、行こう。聡次郎、お前も行くな？」

「はい」

「組長に頼みに行こう」

そう言つて二人で稽古場を出ようとした時、聡次郎は富士子と目があつた。

「行くのね」

「行かなくちゃいけないんだ。じゃなきゃお前を守れない」

「守ってくれなくてもいいわよ」

富士子がああ、目の色で言う。ああ、今解つた。これは死んだ両親と同じ目の色だ。心から俺を心配してくれている目だ。だから俺はこの目が苦手だつたんだ。

「それじゃダメなんだ。俺はお前を守りたい。お前も前に言つたらう？組長一家を守れないでなんのための組員だつて。俺、ほかの誰よりもお前を守りたいんだよ。だからお前に待っていてほしい。お前が待っていてくれれば、俺、落ち着いてやれそんな気がする」

富士子はしばらく黙って見つめていた。

「解った。待つてる。待つてるから無事に戻って、聡次郎。人も斬らず、自分も斬られずに帰って来て」

聡次郎はうなずいた。

「行ってくる」

そう言って二人は出ていった。

組長の許可はすぐに下りた。聡次郎は刀を携えて乱闘に向かう。

喧騒のただなかにあっても、あの、おかしな高揚感はない。むしろ心の奥が澄んでいる。

「俺は華風組の聡次郎だ！怪我したくなかったら、しつぱを巻いてとつとと逃げやがれ！」

大声で啖呵を切った。

一人目は刀の鞘も抜かずに叩き倒した。二人目は身ね打ちにした。三人目、四人目と次々に打ちつけていく。

身体が熱くなり、血がたぎる。それでも陶醉感はない。

代りに富士子の声が聞こえる。

「待つてるから無事に戻って、聡次郎」

そう、俺には待つていてくれる人がいる。だから俺は斬られちゃ

いけない。余計な恨みも買っちゃいけない。

この世界で生きるために、富士子を守ってやるために。

乱闘は終結した。相手は皆、逃げていった。

聡次郎達は無事に帰った。一人のけが人も出ていなかった。もちろん聡次郎も無傷だ。

聡次郎はようやく自らの中であつた恐怖心に打ち勝つた事を実感できた。

これで組を、富士子を守ってやれる。心の中が充実感でいっぱいになる。

真っ先に富士子が聡次郎を出迎えてくれた。

「おかえり、聡次郎」

富士子の目に安どの色が見て取れた。

ああそうか。富士子はいつも待っていてくれた。俺が気付かずにいただけで。

俺が自分の事しか見えていない時も、本当は待っていてくれたんだ。

気が付くと聡次郎は、富士子と二人きりになっていた。おそらくハルが気を利かしたのだろうが、聡次郎はもう気にならなかった。

それより今は、誰よりも富士子に褒めてもらいたかった。

「無事に戻れたのね」

富士子は嬉しそうだ。

「このところ、あんたは喧嘩のたびに傷だらけで帰って来たもの。どんなに心配したか解らないわよ」

「もう大丈夫だ。それに今日はお前が待っていてくれたし」

「いつだって待ってたわよ。じゃあ、もう刀を振っても大丈夫だったの？」

「大丈夫だった。代わりにお前の声が聞こえた。待っててもらえると心強かった。ハルさんのおかげだ。ハルさんが身体を張っているな事を教えてくれた。俺、やっぱりハルさんにはかなわないや。俺もあんな男になりたい」

心からそう思えた。嫉妬の渦はきれいに消えていた。

「聡次郎は今のまんまで十分よ。聡次郎は聡次郎。ハルさんはハルさん」

「だけど俺はお前を守っていききたい。組の役にも立ちたい。ここを守りたいんだ。ハルさんになわなくても、せめて近づきたいんだよ。お前は俺を嫌いになったかもしれないが、俺はここで生きていきたい」

富士子は目を丸くした。

「嫌う？あたしが？あんたを？」
富士子は笑い出してしまった。

「だって前に大っきらいって言ったじゃないか」

「あの時あなたはあたしがどんな思いで辞めろって言ったかちつとも解って無かったからじゃないの」
富士子が笑うのをやめて、聡次郎を真つ直ぐに見た。

「あたしはあんたが、聡次郎が大好きよ」

聡次郎は心がいつぺんに明るくなった。今までに失った自信が一気に蘇った気がする。

「……そんな事言つと、襲つぞ」
富士子に一步、近づいて見る。

「……やれるもんなら、やってみなさいよ」
富士子の以前と同じセリフ。でももうあの目の色は無い。優しい目だ。

抱き寄せてみる。富士子は身を固くはしなかった。もちろん手をはらったりしない。

「……」

富士子は何か言いかけたが、聡次郎に聞く気はなかった。口づけて物を言わせない。

いつかの様に、また、啖呵でも切られたら困る！

恋

二人の付き合いが始まって、周りはたいして気にする様子は無かった。

前から聡次郎が富士子に言い寄っていた事は誰もが知っていたし、結局なるようになった。と言うのが大方の見方だった。

その頃は頻繁に喧嘩や乱闘が起こっていた頃で、組の雰囲気も殺伐としていたため、皆が明るい話題に飛びつきたがっていたので、二人の事はむしろ歓迎されてさえた。

ハルは最初から二人の味方で聡次郎には頼もしかったし、おかみさんも富士子の味方だったらしい。ただし一番厄介な人物が二人の事を反対していた。組長だ。

そもそも華風組は家風が厳しい。組員が女の事で組に迷惑をかける事はご法度だ。ましてや富士子は組長の年の離れた妹。組長が賛成する訳もない。特に、こういう問題では組長の意見は絶対だった。

おかみさんはため息交じりに言う。

「あの人もしょうがないわねえ。こういうことでむきになって反対したって、かえって煽るのが関の山なのに。あの人も富士子さんの事となると普通じゃいられなくなるのよね。こればかりは理屈じゃないから説得するのも難しいし」

実際、あの忙しげにしている組長が富士子の事となるとどうやっ

て時間を作るのか、実によく見張っている。富士子の部屋の周りに聡次郎は近づく事さえできない。

二人を外で会わせないためか、聡次郎が組を出ている時間は富士子を外へ出させない。

それでもハルさんやおかみさんが作ってくれる時間を二人は大いに楽しんでいた。

普段が声を掛け合う事さえためらわれるだけに、たまにゆっくり軽口をたたき合えばそんな事さえ楽しい。

ようやく始まったばかりの恋に、二人の心はただ、明るかった。

そう言えばこんなにいい人のハルさんの、浮いた話を聞いたことが無い。何か訳でもあるのだろうかと聡次郎が不思議がると、富士子が教えてくれた。

「あなた、カズヒロさんの話は聞いている？」

「俺の前にハルさんの世話になった人だろう？何でも喧嘩で刺されて死んだとか」

聡次郎は始めてハルに会った日の話を思い出した。

「そう、三年前にここにいたんだけど、カズヒロさんにはお姉さんがいたの。こんな世界から引っ張り出して、足を洗わせようと必死だった。当然よね。こんな世界、身内だったら誰でも嫌がるわよ」
「そう言いながら富士子は目を伏せる。」

以前富士子と口論した時は勢いで「こんな世界に引っ張り込んだ」

と、聡次郎はなじってしまったが、それを思つた以上に富士子が気にしている事を、聡次郎も知るようになっていた。

「カズヒロさんのお姉さんがハルさんの想い人だったのよ。それなのにカズヒロさんは死んでしまった。ハルさんの目の前でね。何でも喧嘩の相手に挑発されて、カツとなつた所を刺されたらしいの」

そうか、だからあの特別な稽古の時に、ハルさんはやたらと俺を挑発したんだ。ハルさんが刺された時も、俺をかばってくれたんだ。俺が同じ目にあわないように。

「カズヒロさんが死んだ時、お姉さんはハルさんを随分なじつたらしいわ。一生恨むとまで言われたらしいの。きつとハルさん、とっても傷ついたと思う。ハルさんだつてカズヒロさんの事、とっても可愛がつっていたんだから。ハルさんの事だから、今でもその事を気にしてるんじゃないかしら？」

人の恨みは買うな。買いたく無くても買うはめになる恨みもある。ハルの言葉の重みが伝わる。

「ハルさんがあந்தの事に必死になるのは、カズヒロさんや、お姉さんへの償いがあるんでしょうね」

なるほど、富士子の言葉は決して多くはないが、ハルさんの事だ。実際には色々な事があつたに違いない。

「ハルさんも、辛い思いをしたんだな」
聡次郎が思わずつぶやく。

「そうね。きつと苦しんだと思う。でも、あந்தやあたしの世話を

焼くことで、少しはハルさんの気が晴れているのかもしれないわ」

「そつだといいな。じゃなきゃ俺、ハルさんに申し訳ない。何も知らずに甘えっぱなしで」

聡次郎はしみじみそう思った。

季節が冬に移っても、相変わらず組長の締め付けは厳しい。ところが聡次郎はだんだんそれを楽しみ始めた。

まるで組長を出し抜いている様な面白さを感じている。

わずかに残る組長への反発心に煽られて、気持ちが高揚していくのだ。そのたびにハルにくぎを刺される。ここにいらなくなれば元も子もない。その思いが自制心を保たせてくれた。

しかし、事態は変わる。

そろそろ富士子の卒業も近づいて来た頃、麗愛会は華風組に手を出さなくなってきた。力がかなり均衡して、消耗戦が増えてきたためだ。そこで向こうは華風組よりも小さな組に目を付けた。その組もかろうじて最悪の事態は避けられたが、代わりに若い男が銃で撃たれて、命は助かったものの片足を失ったらしい。

そんな話が飛び交う中、聡次郎は組長に呼び出された。

組長は開口一番に聡次郎に懇願した。

「聡次郎、ほかの事なら何でも許す。どんな条件でも飲もう。頼むから富士子の事だけはあきらめてくれ。あいつだけは組の者と一緒

にしたくない。いや、この世界の奴とは一緒にできない。あいつは俺達とは違って、ここを出れば普通の幸せをつかむ事が出来る。俺はあいつに普通の幸せを与えてやりたいんだよ。この世界も昔とは違う。銃を持ち出して簡単に命を奪う時代が来た。俺だってお前だっけ。死ぬとも解らないじゃないか。頼むから富士子だけはあきらめてくれないか？」

以前、刀を禁じられた時は、こんな事を夢見たこともあったっけ。今となってみれば、それはどれだけ馬鹿馬鹿しい事だったんだろう。肉親の情にふれて、聡次郎は胸が痛んだ。

組長は苦渋の表情をしている。自分が組長の立場だったら同じように苦しむのだろう。富士子も「辛い世界だよ」と言っていた。あれほどの男のハルさんでさえ、この世界にいるばかりに恋を成就させられなかった。それほどこの世界で恨みを買わず、命を失うことなく、富士子を幸せにするのは難しい事なのだ。

組長を出し抜いているなどと言うふざけた気持ちはいつべんに消え去った。

自分は富士子をさらに組に縛り付けてしまう存在なのだろうか？

聡次郎は初めて揺れ始めた。

そんな気持ちはすぐに富士子に伝わったらしい。富士子は真剣に語りかけて来る。

「聡次郎、あんた、今更迷っているの？ あたしの方はとっくに覚

悟が出来ているのに。ここに生まれた時から、辛いことも、悲しい事も、ずっと受け入れて来たのに。あんたをあの裏口に通した事を、あたしは本当に後悔したわ。あんたをこの世界に入れたのは他でもないあたしよ。今だって後悔してる。そんなあたしが別の幸せなんか探せるって本気で思ってたの？ あたしはね、あんたをここに入れた時、自分の魂をあんたに預けたと思った。あんたが不幸になるなら、それはあたしのせいだと思った。それなのに、あんたはあたしを守ると言ってくれたじゃないの」

「それはお前のせいじゃない。前にも言っただろう？俺は自分でここを選んだって」

「だったらなおさらよ。聡次郎がここでしか生きられないなら、あたしはここにいないしかないの。あたしの魂をあんたに預けてあるんだから。あんたが別の世界で幸せになれるならともかく、この世界にいる限り、あたしはあんたの事が気になって、幸せになんてなれないのよ」

自分がこの世界にいる限り、二人は離れる事が出来ない。そうかもしれない。あの裏口で、富士子は俺の運命を握っていた。あの時俺も、そうとは知らずに富士子に魂を預けたのかもしれない。

聡次郎の迷いは消えた。明るい恋の気分が、真剣な愛情へと変わった。

富士子自身がここまで覚悟を決めているなら、聡次郎に迷う必要は無かった。

二人の思いとは逆に、事態はさらに悪くなった。富士子が卒業す

ると組長は富士子の部屋に外鍵を付け、監視し始めたのだ。これではまるで監禁だ。

いくら覚悟があると言っても、これでは富士子が可哀想過ぎる。すでに正気の沙汰じゃない。何とかならないものかと考えあぐねていると、聡次郎よりも先にしびれを切らした人物がいた。おかみさんだ。

「あなた！いい加減にしなさいよ！」
組中におかみさんの声が響き渡る。野次馬が、皆、富士子の部屋の前に顔を出した。聡次郎も駆けつける。

「あんたがやっている事は、辰雄がお気に入りのおもちゃを手放したくないと駄々をこねているのと一緒に！いつまで富士子さんを自分のモノ扱いしているの？ さあ！今すぐこの鍵を開けないと、こんな扉、私が叩き壊すわよ！」

見れば、おかみさんは大きな花瓶を手にしている。今にも組長に投げつけんばかりの顔をしている。組長は顔を真っ赤にしておかみさんを睨んでいる。こっちも爆発寸前だ。誰も声を立てる事も出来ない。

しばらくにらみ合いを続けた二人だが、ついに組長が口を開いた。

「そんなに会いたきゃ、勝手に会えばいいだろう！」

そう怒鳴って鍵を開けると、出て来た富士子と聡次郎を一瞬睨む。そしてそのまま自分の部屋に閉じこもってしまった。啞然とする二人に

「良かったわね。会ってもいいそうよ。大丈夫、あの人も時期に折れるから。自分の味方が一人もいなくなったもんですねてるだけなんだから」

本当にそうだろうか？ しばらくは疑心暗鬼に駆られた二人だったが、確かに組長の視線を感じる事は無くなった。二人を無視するのがせいぜいだ。

一年後、思い切って二人は一緒になりたいと組長に切り出した。意外にも組長はあっさりと承諾した。

「一緒に暮らしていて今更結納も無いだろう。聡次郎には親もいない事だし。式の手筈は整えるから、日を選んで籍を入れればいい」
そう言っつてむっつりと席を立った。

死

それから一年がたった。聡次郎達は華風の姓を名乗り、組から近い場所に部屋を借りて暮らしていた。二人が一緒になつてからの月日はそれまでに比べるとずっと穏やかなものになつていた。

喧嘩や乱闘の回数もめつきり減つて、小さな小競り合いこそは相変わらずだったが、大きな騒ぎや乱闘に発展する気配は無くなつていった。

その年富士子が子供を宿したため、組長は富士子の心配事が減るようにと、聡次郎をシマの見回りから外し、以前、麗愛会に潰されかけたバーの経営の立て直しに協力するように取り計らつた。すでに聡次郎の名は知れ渡つていたので、毎日店に顔を出すだけでもよそからの邪魔は入りにくい。半分は用心棒の代わりでもあつた。

ところが聡次郎は意外に向いていたらしい。店の事となると普段よりも細かな事に気が廻るようだ。日常と異なる空間に気が晴れるのか、接客もいい。もともと容姿も悪く無いので女性の客足も増えた。

「全くお前は大した奴だ」
ハルがいつもの褒め方をする。

「以前の調達係つてのは伊達じゃ無かつたな。これじゃ富士子さんも別の心配事が増えそうだし」
そう、からかつて笑う。

そんな冗談が通用するほど、二人は仲が良かった。

聡次郎は相変わらずハルとの稽古を続けていたが、すでに木刀での打ち合いでの腕は互角になっていた。時折ハルを上回ることも無い訳ではなかったが、ハルが真剣を握った時の強さを聡次郎は良く知っているので、ハルに追いついたという実感はない。あの特別な稽古の後、ハルと真剣を交えた事は一度も無かった。

聡次郎の日々もすっかり安定したものになり、自分の部屋と店、そして組の稽古場を行き来する毎日となっていた。聡次郎が組へ行く時はたびたび富士子も付いて来て、聡次郎の稽古が終わるまで、組長やおかみさんと話しこんでいるようだった。

その日、聡次郎はハルとの打ち合いをする中で、妙な違和感を覚えた。ほんのわずかではあるが、ハルの左腕の動きが鈍くなるような気がした。

以前ハルは聡次郎をかばって左腕に大怪我を負っている。聡次郎は気になった。

「ハルさん、なんか左腕の動き、おかしくないですか？」
思い切って聞いて見る。

「そうか？自分じゃわからないな。特に違和感もないしハルは意外そんな顔をした。」

やっぱり気のせいかな。そう思っていると、ハルが話題を変えた。

「お前、最近流れ者の刀使いの噂を聞いているか？」

「いや、そんなやつ、いるんですか？」

「本来は何か楽器を弾いていたらしいが、何をどう間違ったのか、こつちの世界で刀を振るいだしたらしい。なんでも相当な腕前だつて噂だ」

「麗愛会の奴でしょうか？」

「言つただろ？ 流れ者だよ。それだけに正体が見えない。誰かに雇われているのかもしれない。気をつけるよ、俺もお前もこの世界じゃちよつとした有名人だ。特にお前はもうすぐ親になるんだし」

「今はシマの見回りにも出ていませんし、店におかしな奴が姿を現したこともありませんよ。大丈夫です」

「ならいいが、今は富士子さんも大事な時期だ。気を付けるに越したことは無いと思つたんだ。頭の隅にでも入れておいてくれ」
そう、ハルがいつものように笑う。

思えばそれが、ハルが聡次郎に見せた最後の笑顔になった。

その後組から帰る時、ハルが「富士子さんもいる事だし、そこまでするう」と、言ってくれた。

今では聡次郎も、富士子と外を歩く時は用心のためにドスを隠し持っている事をハルも知つてはいたが、このところ、富士子を気遣つて帰りに送ってくれる事が増えていた。

二人の部屋が見えた所で、いつものようにハルと別れる。あんまり、いつもどおりだったので、ハルがどんな顔をしていたのか聡次郎は憶えていない。

すぐに、一見おとなしそうな感じの男とすれ違う。直後に聡次郎は殺気を感じ取った。

振り返る。

ハルさんと男が向かい合っている。

二人が同時に動く。

ハルさんが倒れる。

男が走り去ろうとする。

聡次郎が追いかかけようとした時、ハルさんが聡次郎の服をつかんで止めた。

「聡次郎、ダメだ」

「ハルさん」

「お前には富士子さんがいる。子供が生まれる」

「ハルさん、しっかりしてくれ！」

「お前は幸せになれるよ」

「ダメだ！ ハルさん！ 俺はあんたを追い越していないじゃないか！」

ダメだ、ハルさん。目を閉じないでくれ。富士子だってこんなにあんたの名前を呼んでるじゃないか。

「カズヒロに、会える、かな……」

それがハルの最後の言葉だった。ハルはそのまま絶命した。

遺体が組に運ばれると、誰もが悲しみに打ちひしがれていた。ハルさんは組中の者から慕われていた。

富士子が泣いている。おかみさんもだ。以前、ハルさんが怪我をした時も、やっぱり富士子は泣いていた。

あの時は富士子と仲直りが出来て良かったと、ハルさんは笑ってくれたのに。

聡次郎は立ち上がって部屋を出た。刀を握りしめて。

「聡次郎、どこに行く気？」

追って来た富士子が聞く。聡次郎は答えない。

「まさかハルさんの仇打ちじゃないでしょうね」

再び聞くが、聡次郎は黙ったままだ。

「ダメよ聡次郎。あんた、親になるのよ。これから子供を育てるあんたが人を殺してどうするつもり？」

それでも聡次郎の返事はない。

「あんたに人は斬れないわ」

富士子は言い切る。

「あの時、なんでハルさんがあんたを止めたと思ってるの？ あんたに人を斬らせないためよ！ ハルさんはあんたに人を斬って欲しく無かったのよ！ なのにあんたはハルさんの思いを裏切るっていうの？」

富士子は絶叫した。

「……解ってるよ。全部解ってる、そんな事」

ようやく聡次郎の口が開いた。

「ハルさんはいつだってそうだった。俺に人を斬るなと教えてくれた。俺は簡単に人を斬らないとも言ってくれた」

聡次郎の声が震える。

「なのに、そのハルさんが人に斬られて死んじゃったじゃないか！」
涙がこぼれて来た。

「俺は許せない、どうしても。よりによってなんでハルさんなんだよ！ いい人だったのに、本当にいい人だったのに！」

「なら、なんでそんなハルさんの思いを裏切るような事をしようとするのよ……」

富士子が涙にくれながら言う。

「許せないんだよ！ どうしても！ 人の恨みを買うなっつていつも言っつたハルさんが、なんでこんな目に会っつんだよ！ ハルさんは恨まれるなとは言っつたさ。でも、恨むなとは言わなかつた。俺は恨む。ハルさんを斬つた奴が憎い」

「そんなことしても、ハルさんは喜ばないよ。逆に子供を人殺しの子にしたつて、悲しむだけよ」

「それも解つてる。相手が相当強い奴だつてことも解つてる。あの、ハルさんがやられる相手だ。並みの強さじゃないんだろつ。むしろ、俺の方が斬られるかもしれぬ。全部解つているんだ」

聡次郎の振り縛るような言葉を、富士子は聞いていた。

「それでも憎いんだよ。……富士子」

聡次郎は富士子の目を見た。

「別れてくれないか？ たつた今」

「……聡次郎。あんた、何言つてんの？」

「俺がハルさんの仇を打てば、間違いなく前科者だ。生まれてくる子は人殺しの子になる。逆に斬られれば生きて帰れない。これでお前に待てとは言えない。だつたら今すぐ別れてくれ」

「なんてこと言つたよ、聡次郎。そんなことできる訳無いじゃない

の

「お前から預かった魂を、今返すよ。お前は子供と生きてくれ」

「聡次郎、解らないの？ あんたに人は斬れないのに。あんたはあたしを……魂を預け合ったあたしを裏切ってまで、不幸にしてまで、仇を打ちたいの？ そんなに相手が憎いっていうの？」

聡次郎は富士子を抱きしめた。

「ごめん。富士子。それでも、憎いんだ」

富士子に返事は無かった。聡次郎は言う。

「俺は斬られないよ。相手にもためらわない。必ず一刺しで仕留める」

自分が初めて、本気で人を殺そうとしているのが解った。震えが走る。そのまま富士子からそっと離れる。

「さよなら」

それだけ言っつて、聡次郎は組を飛び出した。

後ろから富士子が追ってくるのが心配で解る。それでも聡次郎は振り返らない。

表に出ると、すでにあの男がいた。どうやら自分を待っていたようだ。もしかしたら最初から、自分の方が狙いだっただのかもしれない。

ピン、と空気が張り詰める。力量を計るまでもない。ハルさんを一発で仕留めた相手だ。全身がこれまでにないほど鋭敏になっているのが解る。退路は断った。もう、俺を待つ人はいない。斬るか、斬り殺されるか。

まるでハルさんが乗り移ったような気がした。

互いが動いた。殆んど同時だった。相手の刃をギリギリにかわした。腕を容赦なく斬りつけた。これまでにない、ざっくりとした感覚。これで相手の腕は動かない。刺すなら今だ！

刺すな、聡次郎。

ハルさんの声が聞こえた。聡次郎の手が止まる。

ああ、ハルさん、ひどいよ。こんな時にまで。なんであんたは、死んじまってからもこんなに優しいんだ。

聡次郎は刀を地面にたたきつけた。

「消える！ 今すぐ消えてくれ！ てめえの面なんか、二度と見たくない！」

相手に怒鳴り散らした。男は腕からおびただしい血を流しながらも、ゆっくりと去って行った。

その姿を見送ると、聡次郎はその場に座り込んだ。

気づくと目の前に富士子が立っていた。俺は富士子を裏切った…。

「おかえり、聡次郎」

富士子は言った。

俺は富士子を裏切った。それでも富士子は待っていてくれた。いつものように。

お前の言うとおり、ハルさんが言ってくれたとおり、俺には人は斬れない。それに気づかずには俺だけだったんだ。お前の魂を返したつもりでも、やっぱりお前は俺の中にいてくれたんだ。たとえ俺が裏切ろうとも。

それから数カ月後、富士子は無事に子供を出産した。男の子だった。

子供の名は「ハルオ」と命名された。

ひとつ

ハルさんが逝ってしまった時は、本当に寂しかった。心に穴が開くとはこういうことなのかと、嫌でも思い知らされた。でもそれは、富士子を失った時の比では無かったんだ。

あの日はハルさんの一周忌で、俺達は久しぶりに集まっていた。

法要を終え、組に戻り、ハルさんを偲んで思い出話ばかりをしていた。

組を出る時、俺はほんの少しだけ、先を歩いていた。

富士子は組長達とまだ話していたし、久しぶりに会ったハルオとの時間を組長達が惜しんでいるように思えたから、本当に少しだけ先を歩いていた。

富士子達は、すぐ、追いついてくるはずだった。

ハルさんの時と違って、殺気なんてまるで感じなかった。

後ろの様子がおかしいと思った時には、すでに富士子は倒れかかっていた。

今でも蘇る、スローモーションのような光景。

俺が踵を返す時、刺した女はすでに自分の胸を貫いていた。二人

の女が倒れる。

富士子は組長の腕に崩れ落ちていた。俺はその手を握った。

「聡次郎、生きて」

「富士子」

「生きて、組を守って」

富士子はまだ何か言いかけていたが、言葉にならずにことごとく死んでしまった。

解ってるよ、富士子。お前はハルオの事を言いたかったはずだ。

本当は真つ先にその名を呼びたかっただろうに、俺のために、先に俺の名を呼んでくれたんだ。

そんな風にして、俺は富士子を失った。

刺した女はハルさんを殺した男の恋人だったと聞いた。

あの時俺は、男を刺しこそはしなかったが、男の腕を奪っていた。男は何かの演奏家で、俺が最後の仕事になるはずだったらしい。恋人とやり直すつもりだったらしい。

……仕事。仕事で人が殺せるのかよ。

しかし男は自分で命を絶ってしまった。俺は仇さえも失った。

俺があつた男を真底憎んだように、あの女も俺を憎んだんだろう。そして、富士子までも。

俺は人を三人殺した。殺したも同然だ。俺の、ハルさんを失った時の憎しみが、三人の命を奪ったんだ。

せめて、ハル才を守ろうと思った。こんな血塗られた手で、母親を奪ったも同然の手でハル才を抱くのはためられるが、せめて守つてはやりたいと思つていた。

しかし、それさえも許されなかった。

切り出したのはおかみさんだった。組長は、もう三日も部屋に閉じこもつていた。

「聡次郎、こんな事を言うのは本当に心苦しいんだけど」
実際、おかみさんの表情は苦しげだった。

「ハル才を私の知人に預けようと思つたの」

「え？」

聞き返した俺は、言葉の意味を飲み込むのに、随分時間がかかった。ハル才をどうするって？

「結局、あの男が誰に雇われたのか解らないのよ。うちの若い者も

正体の知らない者に狙われたらしいの。これまでの経緯から察すると、多分、一番の標的はあなた。次に狙われるのはハルオでしょう。今は主人もあなたもこんな状態だし、このままじゃ、ハルオの命が一番危ないわ。解って頂戴、聡次郎」

解れ？ いったい何を解れって言っただ？ 富士子を失って、ハルさんもいなくて、このうえハルオまでも手放せって言っただ？ そんな俺に組を守れって言っただ？ 組を守って生きろと。

だが、今、おかみさんと口論できる余裕はなかった。言葉のすべてが心の闇に沈んで消えていくようだ。

「大丈夫よ、本当に信頼できる人だから。こんな世界にかかわっているのに、昔堅気で情の厚い、優しい人なのよ。もしかしたらハルオにとってもここで育つより、ずっといいのかもしれない」

俺なんかの手で育つより、ずっといい。そんな事言われなくても解ってる。だが、恨みにまみれた俺の手じゃ、ハルオを守ってやる事さえできないのか。

俺に父親の資格はない。あの時、ハルさんの仇への憎しみでいっぱいになった時、俺は富士子とハルオをすでに裏切っていた。あの時、富士子はそれでも待っていてくれたが、これはきつと、その罰なんだ。

「あんだ達の帰る場所を守りたいだけ」 「待ってるから、無事に戻って聡次郎」 「とっくに覚悟はできている」

思い出す、富士子の言葉の数々。富士子はこんなにも組を、俺を愛していてくれていた。誰よりも、俺の心を守っていてくれていた。それは身体の危険を守る事よりも、どれほど難しい事だったんだろう。

あいつは優しくかった。そして、本当に強かった。俺なんかよりもずっと。

なんで、俺はこうなんだろう？　なんで、富士子やハルさんのように優しく生きられないんだろう？

せめてハルオはハルさんのように、優しく生きてくれるだろうか？　優しい人に育てられれば、人の身も、心も傷つけない、優しい男になってくれるだろうか？

その後、外へ出た記憶は正直無かった。どこをどう歩いたのか、飲んだ記憶さえ無い。命を狙われている事さえ、どうでもよかった。最後に生きると言った富士子の言葉が、切ない。

気が付けば誰かに話をしていたようだ。

……奥さんが亡くなったの？　……それは気の毒ね。

……息子さんも手放さなきゃいけないの？　……それは辛いわね。

……とにかく飲んだら？　ここは私がおごるから。……女におご

られたくない？ ばかねえ。こんな時に。

……それに私はもともと男よ。半分男みたいなものだからいいでしょ。

……女の人生も悪くないわよ。下手な男よりずっと強いし。……私は女に生まれ変わってよかったわ。

「女は強いよ。あいつも強かった。……愛？ 馬鹿言え、そんなもんじゃない。俺達は、魂を預け合った仲間なんだ」

回らないろれつで、そんな事を言ったような気がする。

酒の海に溺れながら、眠り込む前に、ふと、考える。

女になって生きる？

姿も、名前も変えて、力に頼ってばかりの弱さもたち切って、富士子のように、強く、優しく、生きられたら……

姿を変えて、聡次郎がいなくなれば、いずれ人の記憶からも消えるだろう。そうなれば組が付け狙われることもなくなる。ハルオだつて安全だ。

もう、刀なんて握りたくない。腕っ節なんて欲しくもない。そんなもんじゃ何にも守れなかったじゃないか。それならいっそ。

富士子。お前は俺に生きろと言った。組を守れと言った。お前は立派に組を守っていた。俺は未だに心が折れればただの組のお荷物だ。お前に出会ったあの頃と、何にも変わっちゃいない。

今のままじゃ、お前との最後の約束を果たせそうにない。

そして、生きる

聡次郎は、扉の前に立っていた。病院の扉だ。

短絡的かもしれない。女々しいのかもしれない。でも俺は決めた。

あの日、あの裏口で、お前は俺の運命の扉を開いてくれた。この世界で生きる道を開いてくれた。

「聡次郎は聡次郎、ハルさんはハルさん」

お前の言ったとおりだ。

俺はハルさんのようにはなれない。あんなに強く、優しくは生きられない。でも

今、俺は決めた。二度と刀を握らないために。つまらない恨みを買わないために。ハルオの安全のためにも。

何より富士子。お前のように生きるために。少しでもお前の生きざまに近づけるように。

富士子。お前にあずかってもらっていた魂を、今こそ返してもらおうよ。俺達の魂はこれから一つになるんだ。

俺は女に生まれ変わって、お前を目指そう。

今、俺はあの裏口にいた時と同じ気持ちだ。これからどんな人生が待っているのか解らない。それでもお前の魂と一緒に生きてくれ

るなら、こんな世界でも生き抜いて行けると思う。組を守っていけると思う。

お前やハルさんに甘えていた、聡次郎はもう、おしまいだ。

そして、聡次郎は自らの手で、扉を開いた。

組長夫妻が私を見つけ出した時、私はすでに聡次郎の姿ではなかった。身体の腫れもほとんど引けて、薄く紅さえ引いていた。

それでも二人は私を組に連れ帰ってくれた。富士子と暮らした思い出の部屋は自分で引き払った。

私は組長に願いでる。

「私は、華風の名をお返ししようと思います。代わりと言ってはなんですが、一つだけお願いがあります」

「どんな願いだ？」

そう聞かれて、組長の目を真っ直ぐ見る。

「どうか私に富士子の名を名乗らせていただけませんか？」

「富士子の名を……」

「これからは、土間、富士子として、生きていきたいと思えます。深く、頭を下げる。」

組長はしばらく私を見ていたが

「いいだろう、ただし、条件がある」

「条件？」

「お前はどこへも行ってはいけない。性は名乗らずともお前は家族だ。富士子の名を持つものが姿を消すことに、俺はもう、耐えられない。富士子、ここにいてくれ」

ああ、この人は富士子をどれほど愛していたことか。おかみさんが涙を流している。富士子、お前はこんなにも愛されていたんだよ。そして、お前を守り切れなかった私に、ここにいろと言ってくれているんだ。私は心から誇りに思うよ。お前の名前を名乗れる事を。

「これからの生涯のすべてを、この組に捧げたいと思います。あらためてよろしくお願いします」

庭に出ると辰雄がいた。さびしげな横顔だ。富士子はこの子を本当に可愛がっていた。

「どうしたの？」

「誰？」

「私？ 富士子」

「死んだおばちゃんと同じ名前だ」

「……そうね」

「おばちゃんを知っているの？」

「知ってるわ」

「じゃあ、聡次郎兄ちゃんは？」

「二人とも知ってるわ……誰よりも。二人の事ならいくらでも話せるわ」

ここにはお前との思い出がいっぱいある。男としてお前を愛した日々でいっぱいだ。この世のどこかでハルオも静かに暮らしているのだろう。今の私にはそれで十分だ。

「お前は幸せになれるよ」

ハルさんからもらった、最後の言葉。

ハルさん、私は今、幸せです。富士子との思い出に囲まれたこの組を、私が富士子となって守る事が出来る。

私は富士子を目指してここで生きていきます。どこかで幸せに育っている、ハルオの事を想いながら。

富士子。私達が預け合った魂は、今、私の中で一つになっている。お前の魂と共に、私はこれからも生きていくよ。お前の愛したこの

組を守りながら。

完

そして、生きる（後書き）

このお話を思いつくきっかけになった、domannaさんに、このお話を捧げます。

すみません、お詫びです。

本文は13話で完結しています。

完結設定のボタンを押し忘れたため、終わらせられないので、お詫びと、裏話文を書いています。

このお話はツイッター上で、ふざけ話をしているうちに、ノリで進めてしまった「こてつ物語」の番外編になります。

「こてつ物語」をツイッター上で書いている時に、とあるフォロアーさんが、正確にはおぼえてないけど、

「（作中人物の）土間は実は男で、男時代の名は聡次郎。（作中に出て来る）ハルオは実の息子で、奥さんの名前は富士子。だから富士子を名乗ってるんだよ」

なあんて事を、言っつて（書いてか）いたんです。

で、それをヒントに考え出したお話がこれでした。

この大胆な発想がなければこのお話は出てきませんでした。

コミカルな話も、一瞬、浮かびかけましたが、性を変え、どうやら今は一緒にいられずにいる奥さんの名前を名のるなんて、よっぽどの過去があつたに違いない。息子だって離れて暮らしてるし。

これは、悲劇の方が似合いそう！そう思って悲恋物語のつもりで書きました。

楽しんでいただければ、幸いです。

では、ドジな作者のいい訳でした。

(恥ずかしいです)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6599y/>

華風組の聡次郎

2011年11月20日20時10分発行